転生したけど・・・

つらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生したけど・・・

【Ｎコード】
Ｎ６１３３Ｓ

【作者名】
つらら

【あらすじ】
自分のことしか信じてない青年が居た。
自分のことしか愛せない青年が居た。
青年は頭が良く、今は女遊びの真っ只中であった。
そんな青年が殺されて、少女として生まれ変わり、幕が開いた物語。
。
（しばらくの間ですが、作者がミスってしまったので、最新話にＮＥＷってつけます）

転生、そして

暖かい何かに抱かれていた。
思うように動くことも出来ず、話すことも出来なかった。
ぐるぐる、ぐるぐると気持ち悪い。
一体何が起きている？
そう・・・確か、大学の帰り道だった。
俺は何者かに刺されて、死んだのであった。

＊＊＊

気付いたら赤ん坊。前世の記憶付きで。
そう、俺は転生したのだ。
最高だった。しかし、最悪だった。
「瑠美ちゃん瑠美ちゃん、おねむの時間ですよ～」
その赤ちゃん言葉にイラっとしたが、
それ以上に自分の「瑠美」と言う名前に絶望した。
俺が女だと・・・？
食い物程度にしか思ってなかった女。
男だった俺が女であると言う事実が苦痛で仕方なかった。

＊＊＊

鏡に映る自分の姿を見て悲しくなった。
６年たった。
女であることは苦痛だったが慣れてきた。
まぁ、毎日、自分の体と付き合っていれば、少しは愛着も沸いて

くる。

さて、幼稚園時代のことを少し話そう。
初めに、父親と母親が離婚した。
まぁ、よくあることだ。
うちの親はどうやら出来ちゃった婚だったらしい。
で、愛が冷めてバイバイみたいな。
俺は、母親に引き取られた。
と、話が反れてしまった。
なんと言うか、俺も初めは親に悪いと思ってガキの振りをした・・・
・
が、ストレス溜まりまくりで無理だった。
ついで言うと、女言葉や女の子の格好も強制されたが逆らった。
で、じゃれ付いて来るガキ共がうざくて、ぶっ飛ばしていたら、
ガキ大将になっていた。
母親に怒られる毎日。
曰く「女の子なんだからお淑やかに」と。
曰く「女の子なんだから可愛くなりなさい」と。
それが悪かったのかもしれない。
母親は俺の男の様な振る舞いを心配して、
俺を私立の女子小学校に入学させたのだ。

で、冒頭に戻る。
「あらあら、制服似合ってるわよ、瑠美ちゃん♪」
鏡の前にはブレザーとスカートを身に纏った可愛らしい俺こと「藤堂瑠美」が居た。

学校、友達

俺こと藤堂瑠美は私立雅里（女子）小学校に通う6歳♀です（涙）
現在1年梅組に居て、ストレス溜まりまくりです。
「るみちゃん」
「・・・・・・」
「るみちゃんあちょぼ？」
「他の子と遊べ」
小さい女の子が可愛い？ロリは正義？
確かに可愛いとは思うぞ？
だが、それ以上に鬱陶しいわッ！！
ぁぁ、スカートすーすーするし、先公の話は長いし、♀ガキ共は煩いわで最悪だ。
「るみちゃん・・・いぢわるちないで・・・ぐちゅ」
「って、意地悪してないから、泣くな、な？」
この泣きそうな奴は浜瀬芹（はませせり）と言って俺の前座席に座る子だ。
黒髪ロングで色白な可愛らしい少女。
だが、舌足らずなせいか、他のガキ共と上手くコミュニケーションが取れず、一週間たったのに友達が出来ずに居た。
だからなのか？同じく1人で居る俺に妙に懐いてくる。
「じゃあ、あちょぼ？」
期待するような瞳でチラチラと見てくる。
うおお・・・面倒くせぇぇぇ！！？
「はぁ・・・解った、何する？」
ぁぁ、こっちが折れるしかないよなぁ。
あしらいたいのは山々だったが、泣かれでもしたら、母親に伝わり、さらに面倒なことになるしさ。

「えへ、えとね、おままごと！！」
・・・うん、マジで勘弁して？（滝涙）

＊＊＊

小学校での生活が２ヶ月経った。
最近では仲良しグループが確立され始めたせいか、俺に懐いてくるのは芹だけになった。
そのお陰で楽になり、芹１人くらいの面倒なら見ても良いかなと思う今日この頃である。
キーンコーンカーンコーン
「るみちゃんかえろう？」
放課後になり芹が寄ってきた。
芹と一緒に帰るのが俺の日常になっていた。
「ん、そうだな」
芹が嬉しそうに手を差し出してくる。
その手を握ってやると、その可愛らしい顔が笑顔で一杯になる。
はっきり言おう。
手を繋ぐ意味は解らんが、拒否るとコイツは泣きそうな顔になる。
だから仕方ないんだ・・・うん。。

バスでの帰り道、芹の話を聞きつつ窓の外を眺めていたら、ある看板が目に入った。
へぇ、剣道場か。
そう、俺は前々から、男と戦っても勝てるよな力を身につけたいと思っていた。
何故かって？それは俺が元男だから男の汚さやらエグさを知ってるからだよ。
それに、男にナニされるって想像するだけで気持ち悪い。
だから、女である以上、いざと言う時の為の力が欲しかった。

「・・・るみちゃん」
帰ったら母親に頼んでみッ！！？
「・・・・・・」
顔を俯かせながら俺の洋服を掴んでいる芹が居た。
「せりのこと、むちしないで・・・？」
瞳をウルウルとさせながら顔を上げて訴えてくる。
「ああ？うん、ごめん」
何故かドキリとした。
「もう、むちしない？」
「しないしない」
俺は安心させるように笑顔で言う。
すると芹も釣られて笑顔になった。
「えへへ・・・るみちゃん」
ふぅ・・・。
全く、泣き虫で甘えん坊で泣き虫なコイツは、ほんとに手間がかかる。
まぁ、だからこそ俺が面倒みてやってるのだがな。
「芹、次だぞ。」
「うん！じゃあボタンおしゅね！！」
俺は暖かい目で友達？である浜瀬芹を見守っていた。

学校2、芹

「やだよぉ・・・ぐすっ」
2年生になった。
俺は当前のことながら成績だけはトップだったので特待生となった。
その御褒美として、ついに母親が剣道やら空手などの武術を習うことを認めてくれたのだ。
そう・・・これで俺は、最強になれる!!
このボディーだが、かなり運動神経が良く、俺は女であること以外は、今の俺を気に入りつつあった。

で、そんな俺は芹とクラス分け表を見ていた訳ですが、
「ぐすっぐすっ・・・」
まぁ、お察しの通り、俺は2年松組で、芹は2年梅組で、
「やだよぉ、るみじゃんといっじょがいい・・・」
この泣いている少女のせいで注目を浴びて居ました。
俺、かなり必死です。
「芹、落ち着こう?な?」
バフッ
「やだやだ、るみじゃんといっじょがいい・・・」
うおー、抱きついてきやがった。
つか、そんな涙一杯の目で睨まれても、俺は何も出来ないからねッ!?
泣くなー泣くなー
と、芹をあやしていたら、先公がきた。
「あらあら、仲良しさんなのね、でも浜瀬さんは梅組だからねー。

先生と一緒に行きましょう？
藤堂さんも自分のクラスに早く行きなさい。」
るみじゃーんと言う悲鳴の様なＢＧＭを聞きつつ、別れたのであった。

＊＊＊

特に誰とも話すことなく放課後になった。
「あれ、芹？」
俺のことを待っていたのだろうか？
下駄箱には芹が居た。
「るみちゃん・・・」
俺の顔を見て一瞬笑顔になるが、すぐ暗くなる。
見るからに落ち込んでいらっしゃる。
「るみちゃん・・・」
この子・・・。
「るみちゃん・・・」
この子、凄く何か言いたそうですっ！？？
うおー、面倒くせぇー！！
「えっと・・・何かな？」
とりあえず、目線を合わせてニコニコする。
「あのね・・・、これからもいっちょにかえってほちいの」
はぁ、そんなことか。
「別に良いよ？」
なんとなく、芹の頭を撫でてやった。
「ぜったいのぜったいだよ？やくそくだよ？」
芹は上目遣いで、小指を突き出してきた。
俺は無言で芹の小指に指を絡める。
「ゆびきりげんまーうちょついたらーはりちぇんぼん」
ぁぁ、俺って本当、良い漢（おとこ）だなー。

「えへへ、るみちゃんだいしゅき」
そして、芹に笑顔が戻った。

学校2、芹（後書き）

勇者よ、よくぞ、ここまできたな？

えっと本当に感謝です。

此処まで、お読み頂きありがとうございました。

次回更新遅く？なります。

学校3、委員長

2年の1学期は無難に過ごせた。
成績は当然のことながら生活の態度も高評価になり、母親も喜んでいた。
夏休みは剣道と合気道の修行。
道場では俺つえー状態で、ついついガキ共を泣かせてしまった。
ハン、女だからって舐めてるからだぜ？
後は学校のプールにも行ったりした。
そのさい、芹が泳げないにも関わらず、俺に付いて来ようとして、色々大変だったと綴って置こう。
まぁ、そんな感じで2学期も無難な日々が続くと思っていたんだ。

尻餅ついている少女、それを見下ろす俺。
「あーあ、可哀想に。お友達逃げちゃったね？」
クスクスと、どうみても悪者にしか見えない俺。
「・・・・・・」
ウルウルと怯えている♀ガキ。
と、そこにやってきた強気な目をした少女。
「止めなさいッ！？」
と、怯えている♀ガキを庇うように、俺と対峙した。

2学期になってからだった。
♀ガキ共に悪口やら陰口を叩かれるようになったのは。
ま、当然相手にしなかったが。
また、意地悪のつもりか、ノートやらランドセルを取り上げたり、掃除を押し付けてきたりもした。

すっごく頭が痛くなったが、先生に言うぞと言えば止めたので、気にしないようにした。
で、さっきだ。
♀ガキ共にスカートをめくられ流石の俺もお話することにした。
まぁ、簡単に言えば鬱陶しいから脅すことにしたのだ。
リーダー格っぽい♀ガキの腕を掴み、軽く転ばす。
「次、何かしたら潰すぞ？」
と、睨みを利かせたら、周りのガキ共は逃げ・・・。

それからだった。
数の暴力により、悪者に仕立て上げられた俺。
片や松組の委員長である、真面目な少女、星七華（ほしなな）。

ぁぁ、何故こうなった？

「藤堂さん、無視しないで下さい？」
「藤堂さん、言葉遣いが悪いですよ？」
「藤堂さん、授業中寝てませんでしたか？」
「藤堂さん、皆さんと仲良くしましょう？」
藤堂さん、藤堂さん、藤堂さん・・・。
だぁーッ！！
なんだ、コイツ！？
とにかくうぜぇ！！？
以来、星七華がことあるごとに、御節介を焼いてくるようになったのだ。

＊＊＊

帰り道、ふと心配になった。
「なぁ、芹？」

「なあに？るみちゃん」
コイツはいつもニコニコしていた。
「お前は、虐められたりしてないか？」
「うぅん」
首を振る芹。
「そうか。まぁ、虐められた時は俺に言えよ？
守ってやるからさ？」
「うんっ！！」
ぶんぶん
「えへへー、るみちゃん」
ご機嫌なのか繋いでる手を振り回す。
「はいはい・・・」
俺も不思議と笑顔になった。

学校3、委員長（後書き）

なんでしょうねー？

自分が書きたい内容から、かけ離れて行ってますw

学校４、七華

俺たちは校門前の掃除をしている。
「藤堂さん、手が動いてませんよ？」
この女、星七華に絡まれるようになってから、心休まる暇が無かった。
「あ、そこは汚れるので私がしますわ。」
ほんと小煩く無ければ、良い奴なんだが。
「なんですか・・・？」
校門の外を見ると、男に話しかけられ、不安そうにしているクラスメイトの姿があった。
それに気付いた俺と星はクラスメイトに駆け寄った。
「Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ．Ｃｏｕｌｄ　ｙｏｕ　ｔｅｌｌ　ｍｅ　ｈｏｗ　ｔｏ　ｇｅｔ　ｔｏ　ｔｈｅ　Ｃｉｔｙ　Ｌｉｂｒａｒｙ？」
あー、外人さんか。市の図書館への行き方ねぇ。
「ＯＫ．　Ｔａｋｅ　ａ　ｌｅｆｔ　ａｔ　ｔｈａｔ　ｃｏｒｎｅｒ，　……．」
「へぇ、凄いじゃん」
外人が行ったのを確認して、素直に称賛した。
「そ、そんなことありませんわ。」
星は顔を赤くし、照れを隠す様に返事をした。
「いやいや、本当に流麗な英語だったよ。」
「ほぇ？ぁ、あの、ありがとう。」
ほぇ？？・・・あ、耳まで赤くなった。
「正直、小煩いだけの女だと思っていたから見直したよ」
ぽかーん
「は・・・？

って藤堂さんッ！？私のこと小煩い女だと思っていたのですかっ！？」
え？今更じゃね？

＊＊＊

道場の帰り道、公園で星を見かけた。
あれ？なんか険悪な雰囲気？
ボカッ
って、うおおーい！？
男相手に取っ組み始めたよ！？
「はいはーい、やめようねー」
とりあえず、真ん中に割って入った。
「藤堂さん！？」
「んだ？お前？」
男の子達が睨んできた。
「何で喧嘩してんの？」
って言うか、俺は何故こんな真似をしているの？
「お前には関係ないだろ！」
「黙れ！女の癖に！！」
ああん？
「女の癖に・・・だと？」
「そうだ、引っ込んでろ！！」
うん？ちょっと教育しないと・・・ね？（怒）

「その、ぁりがと。。」
「ん？良いよ、俺が勝手にやったことだし」
事情を聞いたら、コイツの弟がサッカーボールを奪われ、それを取り返そうとして、喧嘩になったとの事だった。
まぁ、なんだ？

「怪我はないか？」
「ぇ、うん！」
なら良かった、とサッカーボールを渡してやる。
「ぁ、ありがとう」
つかコイツ、顔真っ赤なんだが、本当に大丈夫なのだろうか？

＊＊＊

「藤堂さん、おはようございます！」
「ん？星、おはよう。」
なんか朝から元気だな。
「昨日はありがとうございましたっ。。」
「あーはいはい」
ほんと真面目な奴。
「あの、これからは七華って呼んで頂けませんか？」
「はい？」
「えっと、七華って呼んで頂けると嬉しいですうっ！？」
なんだコイツ？
「あー・・・解った、じゃあ俺のことも瑠美で良いから」
「え？・・・ええっ！？」
ほんとコイツどうしたんだ？
「あ、あの・・・瑠美さんッ！？」
「なに？」
「あ、いや、呼んでみただけです」
は？訳解らず七華の顔を見つめてしまった。
ぷしゅー
「変な奴だな」
いや、マジで。
「へ、変・・・。
どーせ、私は小煩くて変な奴ですよ・・・つーんっだ」

なんかコイツ・・・さらにうざくなってね？

＊＊＊

「本当に恥ずかしいです。」

七華が落ち込んでいた。

まぁ、なんだ？

きっと昨日は病気だったのだろう？

何はともあれ正常に戻った七華が帰ってきた？

学校４、七華（後書き）

急展開かなぁ・・・？変な感じがします。

学校5、芹・七華

今日はクリスマスイブ。
そのせいか、教室は賑やかだった。
「瑠美はサンタさんに何お願いしたの？」
ブハッ
お前は芹か！？
委員長様である七華がこんな質問をしてくるとは・・・。
サンタさん恐るべし！！（笑）

ちなみに一昨日、母親にも同様のことを聞かれた。
そのさい、素直に1万円札と答えた俺は愚か者だったのかもしれない。
後日、サンタさんから、道徳の本が送られてきて、母親に読み聞かされたことは言うまでもなかった。

＊＊＊

今日は忌々しきバレンタイン。
チョコ上げないのー？と母親にからかわれたり、
チョコをくれよーと道場のガキから強請られたりで、俺は男だー！！と叫びたくなった。
あれ？なんか涙が・・・。

朝一でチョコを貰った。
「るみちゃん、ちょこっ！！」
通学路に、えへへーと笑う芹が居た。

「ありがと、芹。
俺のことを待っていたの？」
「うんっ！！」
元気良く答え、手を握ってきた。
「せりね、いちばんめがよかったのっ！！」
芹の冷えた手をそっと握りながら、そう言えば去年も、朝から待っていたな、と思い出した。

「瑠美さん、おはようございます」
「おはよう、七華。」
「えっ？それは！？」
七華は俺の持つ白の手提げ袋を見つめていた。
「ああ、チョコ貰ってな。」
「へ、へぇーー？
ふ～ん・・・？そうなのですか？
瑠美さんモテモテですね？良かったですね？？」
一瞬ホッとした様な顔をし、すぐ怒り？始めた。
「お、おい？」
なんだコイツ？例の病気か？？
「瑠美さんなんて知りませんわっ！！」

「あ、あの、藤堂さんチョコどうぞっ／／」
２時間目の休み時間クラスメイトからチョコを貰った。
七華は頬を膨らませている。

「失礼します、藤堂瑠美さんは居ませんか？」
昼休み、同じ合気道に通う女の子が来た。
「何か用ですか？」
「今日はバレンタインなので、はいっ。」
チョコを渡された。

う、う、う〜〜〜ッ！！
七華が凄い目で唸っている。

放課後になった。
七華がのそのそとやってきて、机に袋を置いた。
「チョコ」
ん？
「チョコっ！！」
「えっと、くれるってこと？」
コクリと頷く。
わ、解りずらーっ！？
「あ、ありがと、七華」
「ぅん」
俯きながら頬をほんのり赤く染めた。

帰り道、右腕には芹が抱きつき、左手は七華の手により握られていた。
「るみちゃん、しょの女の子はだれでしゅか？」
芹が頬を膨らませ、聞いてくる。
「貴方こそ誰ですか！？瑠美さんの迷惑になるから離れなさいよっ！？」
正直、どっちも鬱陶しいのですが。
それと声小さくしろ。
「るみちゃんとせりは、いちばんのなかよしなのっ！！」
芹がえっへんと自慢するように言う。
「私だって瑠美さんとは大親友ですわっ！？」
そんな芹に対抗するかのように、七華が胸に抱きついてきた。
ばふっ
「あー！ずるいのっ！！」
「って、歩き難いから抱きついてくるなーッ！？」

抱きついてきた七華を引き剥がす。
「そうだよ！るみちゃんにだきついていいのはせりだけだもんっ！！」
ばふっ
七華に対抗するかのように芹も胸に抱きついてきた。
「って、お前もだぁーッ！！」
抱きついてきた芹を引き剥がす。
ぐすっ
うおおーい！？何故泣きそうになるっ！？
「瑠美さん、私達親友ですよね・・・？」
「あ？ああっ！！勿論だって。」
ぐしゅ
って、お前もかぁー！？！？
「るみちゃんも、せりのことだいしゅきだよね・・・？」
「え？ああ・・・大好きだよッ！？」
ちょっ！？俺まで恥ずかしいのですが！？
それと、頼むから道端では泣かないでっ！？！？
俺は2人の少女に翻弄されていた。

学校5、芹・七華（後書き）

お読み頂きありがとうございました♪

なんか色々と難しいです。。

学校6、転校生（前書き）

真央の台詞を若干変更。後は改行を消しました。

学校6、転校生

なんかデジャヴ。頭を押さえつつ、そう感じた。
始業式が終わり、3年生となった俺たちは、クラス替えの紙を見ていた。
藤堂瑠美：3年松組、浜瀬芹：3年梅組、星七華：3年松組、・・・。
これを見た瞬間、嫌な予感がしたんだ。
ぐしゅ
ぁぁ、芹。やっぱりですか（涙）
「くらしゅがちがうの・・・。」
「芹泣くな、な？クラスが違っても俺と芹は仲良しだろ？」
俺、今年も必死です。
「ぐしゅ、でも・・・ぐしゅ」
ふぇぇーん
「よしよしよし。」
頼むから泣かないでっ！？
今年も周りからの視線が痛いですっ！！
袖を掴みながら大泣きする芹に、俺は困り果てて居た。

「瑠美さんお疲れ様です。」
どうにか芹を送り届けることに成功した俺は、クラスで七華に話しかけられた。
「ああ、うん。」
「本当に仲良しなんですね。」
苦笑いしながら言ってくる。

「まあな。
はぁ、先公共は何故俺と芹を一緒のクラスにせんのかね。」
全く、先程のようになるとは、想像出来んのか？
「瑠美さん、言葉遣いが悪いですわよ。
あれ？瑠美さんはご存知では無いのかしら？」
「何をだ？」
「クラスは成績順で決まるのですよ？松が上位で竹が中位、梅が下位と。」
唖然とする。
言われてみればこのクラスのガキ共、テストの結果発表でちらほらと名前を見る奴ばかりである。
「ああ・・・」
って事は、って事はだな。
あまり頭のよろしくない芹とは、一緒のクラスになる可能性は無いってことか。
「芹には言えんな。」
「・・・ですね。」
簡単に悲劇が想像できた。
「その・・・瑠美さん？
浜瀬さんのことは残念ですが、私だって瑠美さんと同じクラスになりたかったのですよ？
だから、今年も宜しくお願いしますね？」
七華は頬を赤くし、笑顔でそう言った。

ホームルームの時間、転校生が紹介された。
腰まで伸ばした黒髪に雪のような白い肌、しかし冷たい目をしていたせいか、子供の様な可愛さは感じられず、美しいと言う印象が強かった。
「彼女は帝日（ていにち）学園初等部から来ました出木真央（いずるぎまお）さんです。

皆さん、仲良くするように！」
帝日学園、多くの国家議員や旧華族などの御子息御令嬢様が通う、超一流のお金持ちしか通えない学校と噂では聞く。
そして出木と言えば、３８歳と言う異様な若さで外務大臣に就き一躍有名となった出木康平（いずるぎこうへい）と同じ苗字だった。
まさか、そこの娘さんだったりとかは、流石に無いよな？
「では、出木さん？皆さんに挨拶して貰えないかな？」
「出木真央です。よろしくお願いします。」
恐ろしく平淡な声だった。

＊＊＊

出木真央は誰も寄せ付けなかった。
俺も一度だけ七華と一緒に話し掛けたが無視された。
彼女は話し掛けられても全てを拒絶した。
「出木さん、心配ですわ。」
七華は一ヶ月たっても馴染めてない出木真央の心配をしていた。
「そうかぁ？」
そう答える俺をジト目で見てくる。
出木は馴染めてないと言うより、望んで孤立している様に見えた。
「そうですよ！
だって、このままクラスで浮いて居たら、去年の瑠美さんのようではありませんか！？」
「あー・・・」
コイツはコイツなりに心配しているのか。
「とは言っても、どうするの？」
「だから私、出木さんとお友達になろうと思います！」
それから七華は何度も出木に話しかけたが、無視された。
「待ちなさいっ！！」

だから、七華は一向に話す気配の無い出木の腕を掴み無理やり引き止めようとしたら、
パシン
と、出木に手を叩かれ、睨まれて、
「二度と話かけないで？
あんたウザイだけだから。」
と、吐き捨てられた。
って、おいおいおい！？流石にこれは・・・。
少しくらい空気読んでやれよ！？
「七華、大丈夫か？」
「・・・え？うん。」
「その、なんだ？元気出せ？」
「・・・・・・」
コイツ、震えてやがる・・・！？
っち、見てられねぇ！！
だから俺は、そんな親友のことを
ぎゅっー
「七華」
壊れ物に触るかのように優しく抱きしめ、あやしてやった。
「悲しいなら、泣け？」
目が合い、交わり、そして、七華は泣き出した。
それ以後、七華は出木を避けるようになり、そして出木真央は望み通り独りになった。

学校6、転校生（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
ああ、現実逃避なう。

学校7、七華2

今日は七華の班がトイレ掃除の当番だった。
その筈なのに、班の子達は帰ろうとする。
「貴女達、掃除の当番日よ？」
「ごめーん、うちら用事あるから帰って良い？」
ふと、七華は思い出す。
以前にも同じような事があり怒ったら、鬱陶しがられた事を。
だから今までの様に「掃除は皆の仕事ですわ！？」とは言えず、
「今回だけですよ？」
気付いたら、何かを恐れ、そう口にしていた。
次第に七華の班は七華以外、掃除をしなくなった。

「委員長お願いっ！！」
七華は友人達に次の時間にある漢字テストのカンニングをさせてくれと頼まれて居た。
「それは駄目ですわ。貴女方の為になりませんもの！」
「委員長は真面目すぎるってー！？マジありえないよ？？」
だから見せろと少女が促す。
「そうそう、皆普通にやっているよ？」
委員長ありえなーいって態度で少女は言う。
「でも・・・。」
七華は何故か断ると言う行為が怖く感じた。
だから、言ってしまった。
「次は自分で頑張ると約束するのなら、今回だけ、特別ですわ。」

七華はそんな自分が嫌になった。

＊＊＊

俺は放課後、図書室から借りていた本を返しに行った。
教室に戻ってきたら、1人で掃除をしている七華が居た。
「あれ？班の奴等は？」
「用事があるらしく帰ったわ。」
「ふーん？」
その日は特に疑問に思わなかった。

今日は俺の班がトイレ掃除の当番だった。
トイレ掃除を終え、教室に戻る途中、廊下を1人で掃除する七華が居た。
あれ？また1人？？
「七華、班の奴等は？」
「今日も用事があるらしいわ。」
何かが可笑しい、そう思った。
「大変だろ？手伝おうか？」
七華は首を振って大丈夫と答えるだけであった。

それを聞いて俺は耳を疑った。
真面目な七華がカンニングを見逃し、さらには許したと言うのだ。
普段なら絶対に不正など許さず、相手を叱るか注意する筈なのに。

何かあったのか？
思い出して見れば、この前から七華は変だった。
何故か一人で掃除をして居たり、御節介を焼かなくなったりと。

前の七華だったら無理やりにでも掃除させるし、悪いと思ったことは注意するなり叱るなりしていた筈だ。
いつからだ？
あぁ、あれからか・・・。

次の日、七華が病気で学校を休んだ。
俺はお見舞いに行こうと思った。

「七華、生きているか？」
七華のお母さんにお見舞いに来たと言って、自分の名前を告げたら、喜んで通して貰えた。
「え、瑠美さん？どうして・・・？」
意外だったのだろうか？七華は驚きつつ、何故か申し訳なさそうにしていた。
「心配だし、お前と話がしたかったからだよ。とりあえず、大丈夫か？俺が出来ることであれば何でも言ってくれ。」
「・・・瑠美さんが、おそばに居るだけで嬉しいですわ。」
「そうか。

・・・なぁ、七華？」
「何ですか？」
「お前は、出木真央の時の様に、人に拒絶されるのが怖いのか？」
七華は驚いた様な目をする。そして、こくりと頷いた。
「そっか。一つだけ言っておくぞ？俺はお前にどんなことをされても、絶対にお前のことを拒絶しないから、安心しろ。」
七華の頭を優しく、優しく、撫でてやった。
「だから学校で、嫌がられ鬱陶しがられないよう、していたのか・・・。

もう、大丈夫だ。」
七華は、出木真央の件が切欠で、気付いてしまったのだろう。
クラスの子達にどう思われていたかを。
「瑠美さん、・・・瑠美さんッ！！」
七華は胸に抱き付き、泣き出した。
（瑠美さんだけが、私のことを解ってくれる。
瑠美さんだけが、ありのままの私を受け入れてくれる。）

（瑠美だけは、瑠美だけは絶対に私のことを嫌わない！瑠美だけは絶対に私の味方で居てくれる！！）
その事実に、七華は涙を流し歓喜した。

その夜、七華は瑠美のことを考えていた。
（私、星七華は藤堂瑠美さんのことを愛していると認めます。
もう駄目です。もう無理です。この気持ちには嘘がつけません。
貴女のことが、どうしようもないくらい好きで、考えるだけで胸が高鳴り、そして苦しくなります。
私には貴女しか居ません。
それなのに、どうして私達は、女の子同士なのでしょうか？
こんなにも貴女のことを愛し、必要としているのに・・・）

＊＊＊

容姿端麗で文武両道、まるで物語に出てくるかの様な主人公（ヒーロー）に、誰だって一度はなりたいと思ったことがある筈だ。

いきなりだが、俺は知っての通り、転生前は元男だ。
だから、自分がどんなに可愛くても、女であると言う事実は受け入れ難かった。
また女である以上、男と言う生き物を知る俺は、真の意味で男を

恐れ、武術を習い対抗出来る力を求めていた。
俺は自分の身体能力が高いのは知っていた。
しかし、剣道と合気道を始め、たった一年で、小学三年生の身でありながら、小学六年生の男相手に勝てる程に強くなるとは想像してなかった。

要するに、転生のお陰で大学生並の知識を持ち、武術に関しては非凡な才を、容姿も非常に可愛く、俺は、俺が理想とする、美しくて最強な主人公であった。

だから俺は、女の身ではあるが、今の自分も好きだった。

学校7、七華2（後書き）

お読み頂きありがとうございました♪

今回の内容は、変に細かく書きすぎてしまったかもしれません・・・。

後、改行ばっかの文章から進化を遂げました！

ふぅ・・・ヤンデレっぽいこと書けて満足です♪

学校8、七華3（前書き）

芹の話の部分だけ若干修正しました

学校8、七華3

「瑠美さんおはようございます。昨日はありがとうございました。」
っふ、朝から糞丁寧な奴だな。
「おはよう、七華。もう病気は大丈夫なのか？」
「はい♪瑠美さんの御陰で治りました。」
「は？俺は何もしてないぞ？」
確かにお見舞いには行ったが、やった事と言えば悩みを聞き出し励ましたくらいだ。
「いいえ！瑠美さんの御陰です！！」
七華は顔を近づけ、力強く断言した。
「そ、そうか・・・。」
えらく迫力があった。
ともあれ、元気になったみたいで安心した。

一時間目の休み時間。
いつもなら授業の予習なり準備をしている筈の七華が話しかけてきた。
なんか珍しいな？
「瑠美さん？漢字テストの勉強、してきました？」
「いや、してないぞ。」
そもそもする必要がない。
「あら、瑠美さん。仕方がないお人ですね？」
そう言って、俺に寄りかかってきた。
「今日のテストはここからこのページまでが出題範囲ですわ。ですから、このページを確認しとくと良いですよ。」
と、教科書を捲りながら丁寧に説明してくれたのは良いが近い！

！近すぎるッ！？
七華の体が肩に密着し、横を向くと、俺の唇が顔に触れそうだった。
「も、もう大丈夫だからっ！！ありがとな！？」
「そうですか・・・。」
七華は名残惜しそうに俺から離れた。

二時間目の休み時間、また七華が話しかけてきた。
「瑠美さん？何処行きますの？？」
席を立つ俺を見て聞いてきた。
「ちょいトイレにな。」
そう言って廊下に出たら七華が慌てて付いて来た。
「わ、私もご一緒しますわ。」
何故か上擦っている。
って言うか、女も連れションするのか・・・。正直、男だけだと思っていたぜ？
シュイーっと出して、手を洗っていたら、気まずそうな七華が居た。

三時間目の休み時間も七華が話しかけてきた。
オイオイオイ？
流石におかしいと思った。
「あのさ、いつもみたく授業の準備や、予習とかしないで良いの？」
しゅん、と七華が落ち込んだ様に見えた。
「・・・私が来たら迷惑ですか？」
不安そうな目をして言ってくる。
「いや、そうじゃなくてだな。何と言うか、良いのか？と思ってさ。」
「良かった・・・。それなら問題ないですわ。私も皆さんのように、休み時間は友達と過ごすことにしましたの。」

「へぇ・・・？そうなのか？」
「はい！だから、毎日、瑠美さんのお傍に居ますわ♪」
七華は俺の目を見て、それが当然であるかの様に答え、微笑んだ。
「・・・・・・は？」
意味が解らなかった。

給食の準備時間、七華とお手洗いに行っていた。
「今日はこれで終わりですね。」
「だな。」
今日は午後に授業が無く、給食を食べたら即下校だった。
「瑠美さん、良ければ一緒に帰りませんか？」
期待する様な目で言ってきた。
「あー・・・俺は芹と一緒に帰るけど、
七華が芹も一緒で良いのなら、頼んでみるぞ？」
昔、三人で帰ったことがある。
その時は、どちらの方が俺と仲良しかを張り合い、泣いたり叫んだりと喧嘩して大変だった。
そして、芹に相談せず勝手に誘った俺は「ふたりでかえりたかったの」と責められた。
だから、俺としては二人で帰る方が精神的に楽なのだが、芹とは絶対一緒に帰ると約束している以上、七華と二人で帰るのは無理だった。
「いえ、それなら遠慮致しますわ。
お二人の仲を邪魔する訳にはいきませんし。・・・ふふ」
「うん、何かすまん・・・」
怖いです。目が笑っていませんよ？
「一つだけ・・・確認しといて良いですか？」
「ん、何を？」
七華が一息吐いて、真剣な顔をする。
「瑠美さんは浜瀬さんのことを、どう思っているのですか？」

「んー・・・芹は、俺の大切な友達で、あと世話の焼ける娘って所かな？」
「そうですか・・・。」
（安心しました。
瑠美さん、その言葉信じていますよ？）

＊＊＊

朝、病気のことで瑠美さんに心配されました。
その事が嬉しくて、同時に申し訳なかったです。
本当は、病気じゃなくて単なる登校拒否。
瑠美さんに言われた通り、拒絶されるのを恐れ、皆に本心を言えず、限界でした。
だから私が元気になったのは、全て瑠美さんが居た御陰ですよ？

一時間目の休み時間、瑠美さんの役に立ちながら、抱きつくことができ、幸せでした。
ああ、もっと瑠美さんのお傍に居たいです。

二時間目の休み時間、瑠美さんと初めて一緒にお手洗いへ行きました。
そのさい音が聞こえて、私は変な気分になりました。

三時間目の休み時間、瑠美さんの言葉で少し不安になりましたが、私の態度に困惑しているだけの様で安心しました。
そして迷惑で無いと言うことは、これから毎日全ての休み時間、一緒に居られると言うことですよね？

放課後でした。私はクラスから出て行く瑠美さんの後姿を見ていました。

瑠美さんは毎日毎日毎日毎日、仲の良い浜瀬芹さんと帰っています。
ずるいっ！！瑠美さんにも付き合いがあるのは解りますが、私のことを優先して欲しいと思うのは、私の我が儘でしょうか？
本当なら・・・、本当なら、浜瀬さんが居ても一緒に瑠美さんと帰りたかったです。
でも私は、自分以外の子と仲良くする瑠美さんが見たくなかったのです。
だから私は瑠美さんと仲の良い浜瀬さんに対し、感情を抑えられる自信がなく、仲良く出来ない醜い自分を見せたくなくて断りました。

＊＊＊

「るみちゃんはせりのはなしかた、きらい？」
ある日の学校からの帰り道、芹が不安そうな顔で聞いてきた。
「別に嫌いじゃないけど、・・・何で？」
もじもじと俺の様子を窺いながら話し出す。
「えっとね、みんなにへんってわらわれるの。あとね、はなすなっておこられるの。
だからせり、るみちゃんにきいたのっ！」
あー、なるほど。
確かに舌足らずな所は無くなってきたが、いかにも頭の悪そうな、のんびりとした口調だからな。
ガキ共には、芹が何を伝えたいのか解らないことも有るだろうし、そもそも待つって言葉を知らないからなぁ。
この年齢じゃ、仕方のない話か。
まぁ・・・でも、
「確かに、変ではあるな。」

それを聞いて、がーんっとする芹。
「でも、俺は気にしてないし、まぁ・・・可愛いと思うよ？」
「ふみゅ？るみちゃんほんとっ！？」
ぱぁっと笑顔になった。
なんと言うか・・・分かりやすい奴め、と思いながら頷き、俺も釣られて笑ってしまった。

学校8、七華3（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

なんと言うか、主人公以外からの視点で書くのが難しかったです。

学校9、芹2

浜瀬芹には母親が居なかった。
彼女の母は芹を産んで亡くなったのだ。
その変わり、父親の秘書が毎日屋敷に来て家事をした。
芹は屋敷の中で、父親から必要な物だけを買い与えられ、習い事の類は屋敷に教師を呼び寄せ受けていた。
だから幼い頃の芹は、屋敷から外出することは無く、殆どの時間を一人で過ごしてきた。
その結果、勉強以外の教えて貰うべき沢山の大切な事柄を学ばずに育っていた。

芹にはお気に入りの絵本があった。
主人公の少女がそのお友達と楽しそうに日々を過ごすと言ったお話。
芹は幼いながらも、そんな日々に憧れた。
だから、自分もそんな生活が送れるように、絵本の主人公である少女の真似をするようになった。
そんなある日、少女の真似をしていた芹は父親に怒られた。
「芹！！お前は話すとき、発音は出来ない、会話も出来ないで恥ずかしくはないのか！？」
「ぐしゅ・・・せりはちゃんとはなちてるのに、どうちてなの？
う～！う～～～！！」
芹には何故怒られているのか解らなかった。
それでも続けていたら、パシン、と父親に叩かれた。
「いい加減にしろ！！お前はもうすぐ小学生なのだぞ！？」

「ぐしゅ、いたいよぉ・・・ぐしゅ」
「ほんと、妻が命をかけて産んだのがお前みたいな出来損ないで私は虚しいよ！」
「ぐしゅ・・・できちょこない？」
「ああ！お前は出来損ない、失敗作だ！！見ているだけで腹が立つ！わたしは何故・・・。」
ふぅ、とため息を吐き、父親は芹を見ずに考えた。
（家庭教師をいくら雇って勉強させても、全く成果を出せない。
しかも、まともにコミュニケーションすらも取れない。
これが私の娘とは・・・。容姿だけは一流だから、黙らせとけば、恥は掻かずに済むが・・・。）
浜瀬芹の父親は、自分の教育が間違っているとは思わなかったからこそ、娘の悪い部分ばかりに目がいったのだ。

＊＊＊

幼い頃から父親に、話し方を直せと怒鳴られていた。
芹は何故怒られているのか解らず、独り怯えた。
学校の子達にも、話し方が可笑しいと馬鹿にされ、笑われるようになった。
芹は訳が解らず、嫌だった。
じゃあ、瑠美は？と考えた時、芹は急に怖くなった。
だから勇気を振り絞って「るみちゃんはせりのはなしかた、きらい？」と、聞いたのであった。
（えへへー♪るみちゃんにかわいいっていわれちゃったのぉ～～～！）
芹は自分の部屋のベットに寝転び、幸せそうに足をバタつかせていた。
初めてだ。初めて芹は、話し方を否定されずに受け入れられ、し

かも可愛いとまで褒められた。
実際、相手が瑠美と言えども、少しは心配もあったのだろう。
だから芹は、その事実が、貶されてきただけに嬉しくてたまらなかった。
そして同時に、大好きな瑠美がそう言うのなら、ずっとこのままで居ようと思えた。
（せりね、るみちゃんに、またほめられたいのっ！またかわいいっていわれたいのっ！！）
今の芹には、何故瑠美に可愛いと言われたいのかまでは、解らずに居た。

トントン
「お嬢様、社長がお呼びです。」
芹はそれを聞いて、先程までの幸せだった気持ちが嘘のように無くなった。
「芹、お前を明後日行われる会長のパーティーに連れて行く。」
珍しく家に帰って来た彼女の父親、浜瀬博信（はませひろのぶ）がそう言った。
「白のドレスを着て１８時に出発出来るよう、準備をしなさい。」
芹は父親との久しぶりの会話にも関わらず、口を閉じて唯（ただ）頷くだけであった。
「あと解っているとは思うが、余計な事は言わず、じっとしているのだぞ。」と、もう用は済んだと言いたげに、博信は家から出て行った。
そこには何一つ、家族の様な遣り取りは存在しなかった。
（・・・もうねるの。）
何もする気が起きなくなった芹は、暗くなる心を抑え寝る事にした。

＊＊＊

次の日の朝だった。
「るみちゃんおはようなのっ！」
通学路に元気一杯な芹が居た。
「あれ？どうしたの？」
「せりは、るみちゃんをまってたのっ！！」
えっへん、と芹が偉そうに言う。
「ぁーうん？じゃあ一緒に学校行くか？」
うん！と言って芹が手を握ってきた。
「るみちゃん！せりね、きょうにじかんもはやくおきたのよっ！」
「へぇ、なんで？」
つか、ニ時間？？
「えへへー、るみちゃんといっしょにがっこういくためにはやくおきたのっ！！」
そう自慢気に言ってきた。
「そ、そうなんだ？」
「うんっ！！」
いやいやいや、この子その為だけに二時間も早く起きたの！？
つか、一緒に登校するくらいで、どんだけ楽しみにしていらっしゃるの！？！？
その後だった。
学校に入ってから芹の足取りが重くなってきた。
そしてクラスの前に着き、・・・何故か芹が手を離してくれない。
「あー、芹？クラスについたぞ？」
「うん・・・。」
芹が落ち込んだ顔をして下を向く。
「ど、どうかしたのか？」
「・・・・・・。」
一体どうしたって言うんだ・・・？
「よしよし、芹は良い子だろ？
もう学校だから、自分のクラスに行こうな？」

とりあえず理由が解らない俺は芹の頭を撫で、クラスに行くように諭してやった。
「・・・せり、いいこ？」
「うん、良い子だからクラスに行こう？」
「・・・ぅん！せりいいこだからくらすにいくのっ。」
「えらいえらい」
ふぅ、とりあえず、泣き出さないで良かった～！
俺は笑顔になった芹を見届け自分のクラスに入った。
「おはようございます、瑠美さん。お優しいのですね？」
目の前には能面な顔の七華が居た。
「お、おはよう・・・」
それだけ聞いて七華は席に戻って行った。

休み時間になった。
「瑠美さん？体育館に行きませんか？」
目の前には、体育着に着替えた七華が居た。
「じゃあ行くか。」
と、席を立ったら七華が腕に抱きついてきた。
「おい？なぜ抱きつく？」
「勿論、腕を組む為ですよ？」
いや、意味解らん。
「なぁ？歩き難いから、離れてくれ。」
すると、七華が腕に力を込めてきた。
「瑠美さん？私と腕を組むのは、お嫌なのですか？
先程まで、浜瀬さんとは手を繋いでいた癖に・・・。」
「いや、芹はいつもの事だし？
それに手だぞ？手！！」
「いつも・・・？ふーん、そうですか？浜瀬さんとはいつも手を繋いでいらっしゃるのですね。
ふーん、それなのに私とは嫌なのですか？ねぇ・・・。」

うおーい、話を聞いてくれ！！つか、なんか怖いぞー！？
「だから腕は組んでないと・・・。いや、もう好きにして下さい。」
はぁ、だって何を言っても耳を貸さなそうな感じなんだもん。

体育の授業が終わり道具の後片付けをしていたら七華が手伝ってくれた。
「七華、わざわざありがとな。」
「いえ、瑠美さんのお役に立てて嬉しいです。・・・あっ！」
すると七華が顔を赤らめ言ってきた。
「瑠美さん？その、お役に立てたのなら、頭を撫でて頂けませんか？」
「まぁ、別に良いけど・・・何で？」
俺は頭を撫でつつ聞いてみた。
「だって、浜瀬さんが頭撫でられているのを見て、凄く羨ましかったから・・・」
な、なるほど・・・。妙に納得してしまった。

＊＊＊

夏休みに入って、毎日の様に道場へ通っていた。
剣道もそろそろ潮時だな。
俺が強すぎるせいで、もはや小学生相手では勝負にならなくなっていた。
だからと言って、中学生以上と組み手をさせて貰える訳もなく、学ぶことが無くなってきた。
意味ねーな。とは思っても、この前、合気道も同じ感じで辞めてしまい、柔道に変えて貰った手前である。
これで剣道も辞めたら流石に何か言われるよな。
はぁ、つまんねー。
ドウッ！！

つい本気で打ち込んでしまった。
「大丈夫か？」
あーあ、泣いてやがる、面倒くせぇなぁ。
師範がガキを端に連れて行った。
「藤堂さん、そのですね・・・」
まぁ、年上の男相手に、手加減しろとは言えないですよね。
「すみませんでした。」
だが、この日の俺は退屈すぎてイライラしていたのかもしれない。
「ただ、打ち込みくらいは本気を出したいのですが？」
もっともなことだと思う。
「藤堂さんは女の子でしょ？だから、危ない事は・・・」
女の子だから危ないだぁ？舐めているのか？コイツ？
「なら、師範が相手をして下さいよ？」
「今は皆の指導があるからね？」
なんだか・・・、イライラするなぁ？
「なら、後で良いので、組み手をして下さい？」
・・・なんだか久しぶりに、楽しめそうだな？

そして、師範と組み手をするようになり、そのうち師範程度の実力なら、追い越せると確信するようになった。
しかし、俺は圧倒的に力（パワー）が足りなかった。
技術が無ければ、或いはルール無しでは、強い男には勝てないと言う現実に、気付かされる結果にもなった。
俺はいつの間にか、女であることを忘れ、今の自分に満足し、自惚れていたのだ。
その事実（リアル）にゾクリとした。

学校9、芹2（後書き）

過去の話を書くって難しいですね。文が何度も変になって苦戦しました。

最後にお読み頂きありがとうございました！！

学校１０、真央（前書き）

少し描写を増やしました。
中間から後半にかけて若干修正。

学校１０、真央

夏休みが終わり学校が始まった。
クラスに入り、座席に着くと七華が話しかけてきた。
「おはようございます、瑠美さん。お久しぶりですね？」
七華が妙に久しぶりと言うのを強調してきた。
「おはよう、七華。久しぶりかな？」
「・・・私と瑠美さんは一ヶ月十日ぶりに会えたのですよ？
本当、本当、お久しぶりですね？」
おい？コイツもしかしなくても怒ってないか？（汗）
「あー、うん？そうだな？」
「瑠美さんは、夏休み何をしていらしたのですか？」
「俺は道場に行って修行してたよー」
「他には？」
「え？あ、後は宿題したり、ごろごろしていただけだよ？」
な、なんか、七華の視線が鋭いです。
「ふーん・・・ゴロゴロと言うのは御一人でですか？」
は？・・・ちょっと待て！？コイツどう言う意味で言っていやがる！？！？
「いや、一人でだから！！」
俺、男になんか興味ないよ！？
「・・・本当ですか？なんか怪しいです。」
「ちょ、信じろ！？俺は男になど興味はない！」
肩を掴んで言ってやった。
「男・・・？」
何を言っているのですか？と言った感じの七華が居た。
あれー？

「いや、だから、七華は俺が男とゴロゴロしていると、思ったのではないのか？」
「何故ですか？私は浜瀬さんとゴロゴロしているのかと思って・・・。」
「は？」
うわぁ、恥ず。まぁ、普通に考えてみれば、小学三年生が知ってる筈ないか。
つか、別に芹とならゴロゴロしても問題なくね？
「まぁ、なんだ？とりあえず俺は、誰ともゴロゴロしとらんからなッ！！」
「・・・・・解りました。
ねぇ、瑠美さん？」
七華がそう言って、手首を掴み体を近づけてきた。
「ねぇ？どうして夏休み連絡頂けなかったのですか？
私、ずっと待っていましたのよ？ねぇ・・・？」
「は？」
「ずっとずっと待っていましたの。
私、凄く寂しかったのですよ？」
そう言って、手首から腕へ、腕から肩へ、そして頬へ、なぞるようにして指をはってきた。
その仕草が妙に色っぽく、ゾクリとした。
「え？いや？寂しいのなら、別に俺じゃなくても、他の子と遊べば良いじゃん？」
「・・・・・瑠美さんは、私が他の子と仲良くしても、平気なのですか？」
七華が呟くようにそう言った。
俺は七華が「私が他の子と仲良くしても、平気なのですか？」と言うのを聞いてから、
なんとなく七華が気になり、様子を見るようになった。

すると何故か、妙に目と目が合う。いや、正しく言うと、全て目と目が合ったのだ。
まるで七華が常に俺のことを見ているような、そんな感じだった。
そして事実、七華を観察して気付いた事だが、七華は俺以外の人間と一切関わろうとしなかった。
これは少し不味くないか？
俺はそう思った。
だから、七華が同じ委員会に入ろうと誘ってきた時、俺は七華と一緒に、わざと人気の委員会を選び、じゃんけんで負け、うまく別れた。
願わくは、七華が同じ委員会の子と仲良くなれますように。

七華と別の委員会に入った俺は、放送委員となり、出木真央と一緒になった。
「よろしくな？」
出木は転校して来てからずっと、冷たい目をして無愛想だった。
「ウザイから話しかけないで。」
顔すら向けず、そう言った。
うん、前途多難すぎる・・・。

放課後になった。今日は委員会だ。
「出木、委員会行こうぜ？」
「・・・・・・。」
出木は俺を無視し、一人移動をし始めた。
はぁ。ため息を吐きつつ、後ろから着いて行った。
出木は委員会の最中、仕事に関しては話し合いに参加してくれた。
そして委員会は進んで行き、俺たちのクラスは二週に一度、放送の当番をすることになった。

「少しは皆と仲良くしようぜ？」
委員会が終わり、そう声をかけた。
だってコイツ、上級生に話しかけられても無視、同級生に話しかけられても無視で解っていたけど酷すぎる。
「ッチ、煩いわねぇ？」
「いやいやいや、どんだけ反抗的なの？」
なんてガキだ・・・！フォローするのも結構大変なんだぞ！？
って言うか、何故俺はこんな事をしている？
ふぅ・・・、これだから女は面倒で嫌なんだ。

「瑠美さん？出木さんとは上手くお付き合い出来そうですか？」
七華が心配そうに聞いてきた。
「ん？まぁ、どうにかなるだろ？」
ただし、非常に頭が痛くなりそうだが。
「そうですか・・・。
今日の放送頑張って下さいね・・・？」
七華はそう言って、そそくさと席に戻っていった。

俺と出木は放送室に居た。
「・・・・・・。」
「おーい、無視するなー？」
「あんた邪魔よ。」
「あのな・・・放送は二人でする仕事だから文句言うな？」
「そんなの、知ってるわ。」
こ、この女は、何か俺に恨みでもあるのか！？
「と、とりあえず二人で放送だからね？
俺が喋るから、出木は機械の操作をお願い。」
「・・・・・・。」
出木の手が機械の前で止まっていた。
コイツ、邪魔とか言っといて、さては解らないな？

「出木、ここをこうすれば良いんだよ？」
ニヤリ、と嫌味な意味を込めて笑ってやった。
「・・・ッツ！！」
出木は悔しさと恥ずかしさで一杯と言う顔をした。
「女の癖に、男のような言葉遣いや仕草とかをする痛い奴に・・・！！」
そう確かに出木は呟いた。
「ああん？今、何て言った？？」
「女なのに、自分のことを男のように思い込んで馬鹿じゃないのって言ったのよ！」
「・・・・・・なんだと？」
一瞬、頭の中が真っ白になった。
「・・・確かに、俺は女、・・・超可愛い美少女かもしれない。
お前の言うとおりだ・・・。」
事実を付き付けられ、動揺した。
「だけどな！それでも俺は・・・、男なんだッ！！
男で在るんだッ・・・！！」
誰に言う訳でもなく、自分自身に言い聞かせるように強く、強く、言葉にした。
（何なの・・・コイツ？）
出木真央には藤堂瑠美の心が解らなかった。

＊＊＊

私、星七華は、周りに対して叱ったり注意するのは、もう良いかなと思うようになりました。
嫌われるのも嫌だし、私自身、周りの人が何をしても、無関心になったからかもしれません。
もちろん、瑠美さんに嫌われたくはないので、不正などの手伝いは絶対お断りしますが。

私は好きな人、瑠美さんの前だけ、綺麗である事が出来れば、他はどうでも良いと思えました。

瑠美さんに「寂しいのなら、別に俺じゃなくても、他の子と遊べば良いじゃん？」と言われ、私は信じられない気持ちになりました。

ナンデ？

ナンデナンデナンデ瑠美さんは、他の子と仲良くしろって言うのですか？

私は・・・、私は瑠美さんだけで良いのに・・・。

私は、瑠美さんが他の子と仲良くするのを見ると、嫌な気持ちになってしまうのに・・・。

だから、瑠美さんだって・・・、私が他の子と仲良くしたら、嫌ですよね？

瑠美さんはじゃんけんに負けてしまい、出木さんと一緒の委員会になりました。

よりにもよって、何故私を拒絶した女と？

ずるい、忌々しい、あの女だけは許容できない。

私の中で様々な感情が渦巻く中、瑠美さんを心配して声をかけたら、上手く付き合えそうと言われました。

それを聞き、私は瑠美さんに裏切られた気分になりました。

ねぇ、瑠美さん？何故、あんな女と一緒に居るのですか？

ねぇ、どうして拒絶せずに、受け入れているのですか？

ねぇ・・・瑠美？私、凄く寂しくて苦しいよっ！！

（私、こんなにも、瑠美さんのこと、愛してるのに・・・。）

私には瑠美さんの考えていることが全く理解出来ませんでした。

学校１０、真央（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

学校１１、芹３（前書き）

「学校１０、真央」の方を若干修正・変更致しましたので、
差し支えなければ、そちらから先に読んで頂けるとありがたいです。
（もちろん大半は同じなので、読まなくても大丈夫です）

学校１１、芹３

今は春休みだ。
本来なら道場へ行ってた所だが、昨日芹から電話がきて、今日、家(ウチ)で遊ぶことになった。
「瑠美ちゃんにお友達が居たとはねぇ・・・。
ママ嬉しいわ。」
なんとも失礼な台詞を本人の前で、母親がしみじみと嬉しそうに言った。
この母親、普段は仕事が忙しく夜になるまで家に帰って来ない。
なのに今日は、昨日友達が来ると言う話を偶々したら、なんと仕事を休みやがったのだ！
「うふふ、瑠美？芹ちゃんってどんな子なの？
あっ♪ケーキでも焼いとこうかしら？楽しみだわぁ～。」
まぁ、見ての通り、親子仲は良好だ。
転生者だと疑われたことが無ければ、異様に賢いのも、褒められることはあっても怪しまれることは無かった。
だからこの母親とは、なんだかんだで上手くやっていた。
「るーみーちゃーん♪あーそーぼーっ！！」
ブハッ、今、気のせいか、家の外から芹の声が聞こえたような！？
つか、チャイム使って！？！？（涙）
ドアを開けたら白のドレスの様な服に大きな白の帽子を被った芹が居た。
「えへへー♪るみちゃんこんにちわなのっ！！」
「お、おう。こんにちわ。」
「貴女が芹ちゃん？はじめまして、瑠美の母です。

あらあら、可愛いお嬢さんね！！」
「ふみゅ？るみちゃんのおかあさん？？
・・・！？こ、こんにちわなのっ！？はませせりですっ！よろしくおねがいしますなのっ！！」
一瞬何処ぞのお姫様でも来たかと思ったが・・・、安心の芹クオリティーだった。

芹が家に来てから、母親含め3人で話をしていたら、何故か俺の話題になった。
身の危険を感じた俺は、芹を連れ、自分の部屋へと移動した。
「るみちゃんのおかあさんやさしいねっ！」
「そうかー？」
芹は母親から沢山お菓子を貰い、餌付けされていた。
「うん♪」
ってコイツ、口元がチョコで汚れていやがる。だぁー！！
「芹、ちょっとこい。」
「うみゅ？」
俺はティッシュをとり、芹の口元を拭いてやった。
「折角、可愛い服着ているのだから汚さないようになっ！」
「・・・かわいい？」
芹がボケッとしながら言った。
「ん？ああ、洋服似合っているぞ。可愛くてビックリした。」
「る、るみちゃんほんとっ！？」
芹は急に顔を赤くし、声を上擦らせて言った。
「ほんとほんと」
「・・・えへへー。せり、るみちゃんにかわいいっていわれちゃったのぉ」
芹は幸せそうな顔で、そう呟いた。
「ねえねえ、るみちゃん？きもちいい？」

俺は今、芹に肩揉みをして貰っていた。
最近、春休みだからと言って武術の練習を厳しくしたせいか、俺の体は非常に重かった。
そのことを芹に話したら、なんとマッサージしてくれると言うので、俺はお言葉に甘えていた。
「きもちいぞー♪あー、そこ、そこをもっとぉー」
なんと言うか、マッサージとは、なかなか良いものなのだな。
「芹、マジ上手だ。」
俺は芹に顔を向け絶賛した。
「ほんと？もっとがんばるねっ！！」
モミモミモミ
「あっ、あ～～～ん・・・」
（えへへ、せり、るみちゃんにほめられてうれしいのっ！もっと、やくにたちたいのっ！！）
グリグリグリ
「いいっ、とってもいいのぉー。」

瑠美の母親は娘の部屋の前で唖然としていた。
「あ～、良いのー」
（む、娘達は一体何をしているの！？）
「いい、そこらめぇーーー！！」
（ま、まさか！？女の子同士よ！？
あっ！でも瑠美って、何度教育しても、未だ自分のことを男の様に振舞っているわよね・・・。ま、まさか！？）
瑠美の母は血の気が引いた。
「る、瑠美！？貴女部屋で一体何やってるの！？」
そして母は、慌てて娘の部屋に入るのであった。

母親が急に部屋に入ってきた。
そして、芹に肩揉みして貰っていたと説明したら、「友達に何させてるの！！」と、怒られ・・・なかった。
芹が懸命に説明してくれたお陰で助かったのだ。
「ありがとな、芹。」
「うんっ！ねぇねぇるみちゃん？」
「ん？」
「せりいいこ？るみちゃんのやくにたった？」
先程のことを聞いているのかな？それなら、
「うん、芹は良い子だし、気持ちよかったぞ！」
俺は最高の笑顔で答えてやった。

＊＊＊

俺たちは４年生になった。
今年も当然、芹とクラスが違った。
しかし芹は、俺の不安をよそに泣き出さない。
「大丈夫か？」
「うんっ・・・。せりっ、いいこっだからっ、なかないのっ。」
目に涙を溜め、そう言った。
「偉いな？芹。」
俺は励ますように頭を荒く撫でてやった。
「るみちゃんっ。せりっ、いいこっ？」
「おう、良い子だっ！」
そう言ってやると、芹は一粒だけ涙を零し、えへへ、と笑うのだった。
コイツも成長しているんだな・・・。
俺は芹の成長を嬉しく思いつつ、少し寂しくも感じた。
七華とは同じクラスになった。

しかし七華は、俺が出木真央と同じ委員会に入ってから、口数が少なくなり、時節距離を置くようになった。
「瑠美さん、今年も宜しくお願いしますね？」
「ああ、よろしくな？」
七華はそれだけ言って、自分の席へと戻っていった。
そして俺のことを見つめている。
（ねぇ、瑠美さん？貴女が悪いのですよ？
私には貴女しか居ないのに、他の子と・・・出木さんなんかと仲良くするからッ！）
七華は距離を置いても、他の子と話すと言う訳ではなく、いつも俺のことを見ていた。
（私、不満で不満で、溜まりませんのッ。
だから瑠美さんは、裏切った罰として反省すれば良いのですッ！
そうしたら・・・、瑠美さんも私の大切さに気付く筈ですから・・・。）
正直俺は、そんな七華が少し怖く、心配でもあった。

出木真央とも同じクラスになった。
しかし出木は相変わらず、冷たい目をして人を寄せ付けず、話しかければ無視か毒舌を振り撒き孤立する気満々だった。

＊＊＊

６月の初めであった。
その日は雨が降り、ジメジメと嫌な感じがした。
学校が終わり、委員会も終わって、外が暗くなり始めた夕方頃の帰り道だった。
先方で出木真央が黒服に囲まれ、抵抗しているのを見つけたのは。

最初は何が起きているのか解らなかった。
そんな最中(さなか)、出木が倒れ、瞬間目が合い、ふと前に「それでも俺は男なんだ！」と言ったのを思い出す。
同時に目の前で何が起きているのかを理解した。
「芹、急いで先生達を呼んで来い！！」
気付いたら、俺はそう叫んで、走り出していた。
先には三人の黒服、しかもよく見ると相手は外人だった。
（隙をついてチンコを潰すしかない・・・！）
二人の黒服がそんな俺に気付く。
片方が前に出て蹴りを入れてきた。
遅い！普段剣道で剣先を追っている俺の目を舐めるな！
俺はかわして股間に蹴りをいれた。
（かたっ！？）
黒服は顔を歪めるも倒れなかった。
すると背後に回ってきた残りの黒服がスタンガンをつき付けてきた。
「ッツ」
体を横に傾け転がり、間一髪かわす。
（あ、あぶねー！！つか、まさか金的つけてやがる！？）
すると黒服たちは顔色を変えた。
彼らは相手が小学生の女の子だから舐めていたのだ。
だが、その警戒が一瞬の隙を生んだ。
勝てないと判断した瑠美は、出木の元へと走り出したのだ。
最後の黒服は丁度出木を紐で縛り終え、トランクへと入れる最中(さいちゅう)だった。
（チンコが駄目なら目だッ！！）
俺はそいつの目を狙い、
バン、と足を撃たれ俺は倒れた。
はじめて知る銃の圧倒的な痛み。顔を上げると出木と目が合い、何で助けに来たの？と言われた気がした。

ガシッと誰かに頭を踏まれる。
ガハッ。薄れ行く意識の中で、「それは俺が男だから。男は弱い女を守るものだろ？」と思うのであった。

～　Ｅｎｄ　ｏｆ　Ｅｐｉｓｏｄｅ　１　～

＊＊＊

芹が先生を連れて戻った時には、「出木真央」そして「藤堂瑠美」は居なかった。
「るみちゃんどこ・・・？」
浜瀬芹は子供だからこそ、誘拐されたと言う現実が受け入れられなかった。
（るみちゃんは・・・あしたになったらぜったいかえってくるの。）
しかし次の日、瑠美は学校に居なかった。芹は少し不安になる。
（・・・あしたになったらぜったいかえってくるの。）
次の日も、また次の日も、瑠美は学校に居なかった。芹は段々と不安になってきた。
（るみちゃん、どこいったの？
るみちゃん、るみちゃん、るみぢゃん、るみぢゃん、るみぢゃーーーーんっ！！）
「ぐしゅ、ぐしゅ、るみぢゃんどご・・・？」
そして不安が限界になった芹は、瑠美を探しに行き、夜遅くまで町中を探し、道で倒れ、警察に保護された。
浜瀬芹は大切な人を失って、初めて気付くことがあった。
（るみちゃん。せりね、るみちゃんにほめられたからうれしかったの。
だから、せり、がんばるから、もうなかないから、またほめてほしいのっ！）

瑠美が居たから心が満たされた。瑠美が居たから幸せだった。
浜瀬芹は藤堂瑠美のことを愛していたのだ。

その後、浜瀬芹は誘拐と言う現実を受け入れ、同時に何も出来なかった自分に強い怒りを抱いた。
（これからはせりがるみちゃんをまもるの・・・。）
浜瀬芹は瑠美を守るために武術を、そばに居るために勉強を、必死に頑張るようになった。

これが瑠美だけの騎士、騎士型ヤンデレ浜瀬芹の誕生であった。

～ End of SERI's Episode ～

＊＊＊

朝のホームルーム、星七華は瑠美の席を見た。
そこには誰も居なかった。
そして全校集会があり、瑠美が誘拐されたことを知った。
授業中、休み時間、給食の時間、放課後の時間、全ての時間、星七華は瑠美の席を見た。
やはり、そこには誰も居なかった。

「瑠美瑠美瑠美瑠美瑠美瑠美瑠美・・・。」
七華が虚ろな目をしてそう呟いた。
「ねぇ・・・瑠美」
瑠美が誘拐され三日が経った。
それなのに瑠美は戻って来ない。
「ねぇ、どうしてなの？瑠美。」
決まってる。出木真央（あのオンナ）のせいだ！

全て出木真央(あのオンナ)のせいなんだ！！
「許さない、絶対に・・・」

星七華は後悔した。
そっか・・・瑠美は優しいから騙されていたんだ。
なんで、意地を張って瑠美と話さなかったのだろう。
無理をしてでも、出木真央(あのオンナ)から瑠美を離すべきだった。
そうしたら、こんなことにはならなかったのに・・・。
いや、そもそも私たちが、他の誰にも近づかなければ良かったのだ。
瑠美には私だけが居れば良い。そして私も瑠美さえ居れば他は要らない。
そう、二人だけの世界で良いんだよ。
だから、もう私は迷わない。
これからは、私が瑠美を外界(ほかのにんげんたち)から守ってあげる。
暗い部屋の中、七華はそう狂信した。

これが瑠美に近づこうとする一切の存在を許さない、殺戮型ヤンデレ星七華の誕生であった。

〜 End of NANAKA's Episode 〜

学校１１、芹３（後書き）

今までお読み頂きありがとうございました！！
ここでいったん、完結とさせて貰います。（また、連載中に戻ると思います）
なんと言うか内容はどうであれ、初めてなので満足しました。
さて、作者はリアルを頑張らないと・・・

誘拐、そして

暴力団の組長である鏡宗助は、金の羽振りの良いマフィアから、出木康平の娘である出木真央の誘拐を依頼された。
最初は、政界に太いパイプのある組としては、断るつもりであった。
しかし相手の提示する余りにも大きな金額のせいで、組として断ることが出来ず、保留してしまった。
だからとりあえず、出木真央のことを調査することにした。
若い奴に調べさせ、報告を受けているうちに、出木真央は護衛も付けず、しかも一人で暮らしていることが解った。
それはまるで、誘拐しろと誘っているかのように。
その事から依頼を受けることに決め、切っても大丈夫な組織を雇い、綿密な計画の基、誘拐を実行した。

＊＊＊

「鏡さん！攫って来たぜ？約束通り５千万貰おうか！」
誘拐を依頼した連中達が嬉しそうに言ってきた。
「解った。まずは顔を確認してからだ。」
連れて来られた少女と写真の少女を見比べる。
ほう、どうやら依頼を無事遂行してくれたようだ。
「確かに出木真央だ。約束通り報酬を渡そう。」
「Ｔｈａｎｋｓ。なぁ、鏡さん？もう一人欲しくないか？」
下卑た顔で連中が言ってきた。
「・・・どう言うことだ？」
すると戻って、もう一人少女を連れてきた。

（指示を出したのは出木康平の娘だけの筈だが・・・リスクを考えることも出来ないのか？
それとも俺の事を少女趣味の変態野朗とでも勘違いしているのか？
どちらにせよ・・・、金が欲しいだけか。）
「どうです？凄く可愛らしい娘でしょ？」
（・・・ん？この嬢ちゃんは！？）
不運にも誘拐に巻き込まれてしまった少女の顔を見て、気分が高揚した。
（案外、運命ってのはあるのかもな！！？）
「いくらだ！？」
「二千万くらいでどうですか？」
「解った！買ってやろう！！」
「Ｔｈａｎｋｓ、鏡さんっ！！これからも御贔屓にウチの組織を使ってくだせぇ！」

俺は雇った組織に金を渡し、引き上げさせたら、幹部達に出木真央を空港まで運ぶように命令を下した。
そして、買った少女、藤堂瑠美に関しては俺の部屋で寝かせていた。
そう・・・。若い奴に出木真央のことを調べさせて居た時、唯一名前が上がってきた人間、藤堂瑠美。
出木真央とは友人関係であるかもしれない少女だった。
最初は、調査対象と接触していたから、ついでに調べさせただけだった。
しかし、報告書を読めば読むほどに、この藤堂瑠美の方が気になっていった。
学校での成績は当然の事ながら、作文などを見るに小学生の書くそれとは一線を画し、また小学２年生の頃から始めた剣道と合気道では、僅か半年あまりで小学生女子部の大会を優勝、その後男子部の大会でも優勝する非凡さであった。

勿論、その後に始めた柔道でも同様の結果を残した。
だから、この少女が余りにも凄すぎて興味を惹かれ、そして運命の如く出会ってしまい、買ってしまったのだ。
（本当（ホント）・・・、俺は全くこんな子供（ガキ）に何を期待しているのだか・・・。
でもまぁ、ニ千万もしたが、この美貌と才を持つなら安い物か！！）
藤堂瑠美の可愛らしい寝顔を見て、何故か訳が解らないほどに興奮した。

鏡宗助は気付いて無い。
それは彼が調べているうちに、ただ単純に藤堂瑠美の記録と言う記録に圧倒されファンになってしまっただけの事であった。

＊＊＊

起きたら知らない天井だった。
「気分はどうだ？」
・・・！？部屋には茶髪で身長の高い男が立っていた。
咄嗟に身構えようとしたが足に力が入らず動けなかった。
「貴方は誰ですか？」
間違いなく、普通の人間の持つ空気とは違った。
不味い、何故か足がとても痛い。
「俺は鏡宗助と言ってな、瑠美ちゃんの飼い主だ。」
鏡は自分の言ったその言葉に酷く高揚した。
「・・・・・・」
何故名前を知っている？飼い主ってのは何の冗談だ？聞きたいことは山ほどあった。
しかし、相手の目が本気で、相手の持つ雰囲気に呑まれて、何も言うことが出来なかった。

そうか・・・。
そして俺は気付いてしまった。
出木真央を守れず、一緒に誘拐されてしまった事に。
「・・・出木真央は無事ですか？」
（ほう！誘拐されたと気付いて喚かないか？流石だな！）
「出木真央に関しては秘密だが・・・まぁ、瑠美ちゃんの態度次第かもな？」
その言葉を聞いて絶望したが、そう言われずとも、今はこの男に従うほか無い状態でもあった。
だからこそ俺は、この現実を受け入れた。

誘拐、そして（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

またぼちぼち投稿していければと思います。

日常、真央

出木康平は娘の出木真央を連れ、自党の食事会の会場に向かっていた。

その最中、出木康平は久しぶりに会った娘に目を向けることなく考え事をしていた。

（民主党の佐川麒麟（さがわきりん）。警察を使い私を張って来るとは。何か掴んでるのか・・・？

まぁしかし、依頼した警察署が悪すぎた。

私にとっては都合が良いが、署の責任者が特別公務員暴行陵虐罪を犯しているぞ？

佐川麒麟、人は調べて選ばないとな？

さて、この警察官達には私の為に踊って貰おうか。）

「ねぇねぇ、お父様？

とくべつこうむいんぼうぎゃくりょうぎゃくざいって何ですか？」

出木康平はそんな事を聞いてきた我が娘に目を見開いて驚いた。

まだ幼稚園児である娘が、出木康平が一度も口にしたことの無い言葉を、このタイミングで聞いてきたのだ。

それは偶然？否である。

＊＊＊

出木真央は選ばれた人間、或いは呪われた人間なのかもしれない。

物心がついた頃からだった。相手の目を見ると、何故か考えていることが解った。

私は父に避けられていた。父に構って欲しかった私は幾度も心を読んで話そうとした。
その時、父が何をしているのかは解らなかったが、幼かった私でも、明確な悪意だけは感じ取ることが出来た。

幼稚園児の頃だった。
使用人達に気味悪がられ、距離を置かれた。
私は段々と家で話さなくなった。
帝日学園初等部に入ってからだった。
親に言われ、下心を持って近づいてくる子供達が居た。
表面上は仲良くして、裏では平気で悪口を言う子供達が居た。
親のパーティーでは、相手の陰口を叩いたり、貶めようと企む大人が沢山居た。
みんなみんな自分勝手で汚い人間ばかりであった。

悪意に塗れた世界。
最初は怖かったし寂しかった。だから皆に嫌われないように頑張ろうとした。
しかし、頑張れば頑張るほどに、妬まれ嫌われるようになった。
次第にどうでも良いと感じるようになった。人の心が醜く、近づいてくるなと思うようになったからだ。

そして母の命日。
その時までは、私の相手をしてくれなくても、父親だと思ってた。
墓参りに行く途中だった。偶然父の心を読んでしまったのは。
知りたくなかった。
父が母のことを愛して無かったことを。子供なんか作るんじゃなかったと後悔していたことを。

（ああ、そうか。やっと解った。）
私は父に嫌われて居たんだ。
出木康平の娘であると言うだけで、愛されてなど居なかったんだ。
私は全てに失望した後、父に対し、恨みや憎しみと言った感情を抱いた。
それが態度に出てしまったのか解らないが、家を出され、私立雅里（女子）小学校に転校させられた。
どうせ皆、使えたら利用し、要らなくなったら切り捨てるかのどちらかなんだ。他人なんて道具程度の存在なんだ。
だから、もうアンタ等なんて要らない。
私は誓った。
一人で生きていくと。己以外は信じないと。

＊＊＊

このままだと殺される！
目の前の男達の目を見て、出木真央は嫌でも理解した。
（殺されてたまるかッ！）
このマフィア達は何者かに依頼され金の為に私を殺そうとしていた。
ふざけてる。けど、解り易く言えば、
「ねぇ、間宮和人さん？1億円じゃ少ないでしょ？だから、私と取引しませんか？」
それ以上の金が手に入ると、興味を引くことが出来れば、間違いなく乗ってくる筈である。
真央は組織のトップに言葉巧みに話しかけ、二人で話しがしたい

と頼み込んだ。

私は賭けに勝った。

真央は心が読めることをアピールし、この女は使えると間宮に理解させた。

「とりあえず証拠の写真は、顔の原型が解らないようにして、体系の似た子に私の服を着せれば誤魔化せます。

何せ、依頼者「水田」は私の顔を写真でしか見た事の無い人ですから。」

勿論、殺されない為の嘘である。

間宮の心を読んだ所、依頼者の名前は水田と言い、水田とは裏の案内人を仲介して知り合ったと言う事が解った。

しかし、肝心の水田との遣り取りが全て電話と手紙だったので、顔やその他の情報に関しては全く解らなかった。

「後は、手紙に抵抗が激しかったなり上手く書けば、間違いなく納得するでしょう。」

だから、今はこれで良い。自信のある態度で相手に考える隙を与えなければ。

利用してやる。

身の安全と水田の情報を得る為に。

利用されてやる。

今だけは。

それから私は間宮に力を利用される毎日となった。

（水田は勿論許さないけど、アンタ等も一緒で同罪だから！覚えてなさい？いつか必ず・・・。）

そう言えば、一緒に誘拐された藤堂瑠美は、生きてるのだろうか？

いくら無視しても、暴言を吐いても、構ってきて、あまつさえ、そんな態度しか取らなかった私を助けようとした。

（男だから女を守る？意味が解らないし。そもそもアンタも女じゃん？）
出木真央は初めて相手の心が理解できなかった。
（ま、考えた所で意味無いけど。）
それに心配せずとも、あの女なら上手くやってるような、そんな気がした。

＊＊＊

全く慣れとは恐ろしい。
初めの頃は警戒してたが、組長である鏡は、俺のことを襲うことは無かった。
まだ子供だからかもしれないが、とにかく最初の印象とは違い理知的な人で安心した。

鏡は妙に俺のことを気に入っていた。
可愛がったり世話を焼いたりで面倒を見てくれた。
だから意外と普通な生活が送れ、むしろ男だった頃の気安い会話が出来、居心地が悪く無かった。
とは言え、あくまで目的は出木の情報と此処からの脱出ではあるが。

一方鏡宗助は、瑠美と共に過ごし、予想通りの素晴らしい少女であったと確信した。
自分の目が正しかったことを喜び、またそのことから瑠美が余計に可愛く思え、手元に置きたくなった。
さらには、この少女が誰かに奪われるのでは無いかと恐れるようになり過保護にもなっていった。

ここはある意味スキルアップの場でもあった。
なんと鏡が武器の使い方から戦い方まで指導してくれるのだ。
「く、組長？何故ガキをこんな所に？」
当然ながら、鏡以外の組員からは歓迎されず、常に監視された。
裏切ることを警戒しているのか？いや、流石にこんな状況じゃ無理だから。
気にせず鏡の教えに従い、技術を吸収していった。
「流石、瑠美ちゃん！！」
そんな俺の姿に鏡は何処か狂気的な笑みを浮かべていた。
なんとなくだが、俺に出来ない事など無いと信じ込んでるような節があった。

最初は組員達にとって瑠美と言う存在は邪魔なだけであった。
でも、組長のお気に入りだし、いずれは飽きるだろうと思い各々に納得した。
しかし時が経つに連れ、飽きる所か組長の瑠美への入れ込み具合は酷くなっていった。
仕事場に連れて来たり、訓練場に連れて来たりで、公私混合な組長の姿に組員達は不安を覚えた。
またその瑠美と言う少女も、目に見えるほどの素晴らしい才能を持っていた。
組員達は確かに組に入る可能性があるのならば、リスクに見合った素質を持っていると認め始めた。
それは同時に瑠美が邪魔な存在から、危険な存在へと認識が改められた瞬間でもあった。
凄まじいスピードで力をつけて行く瑠美。
組員達はそれを見て、瑠美の裏切る可能性を憂慮し始める。
いや、違うか。力以前に瑠美はこの組のことを知りすぎた。
だから時間の問題だった。

遅かれ早かれ、二度と表の世界に戻れないようする為に、決断させなければならなかった。

そして瑠美が来て1年が経った今日、鏡は組員達の意見を聞き、簡単すぎるなと思いつつ、銃を渡し、

「瑠美ちゃん、敵(ソイツ)を殺せ」と命令した。

日常、真央（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
本当に長くて申し訳ないです。
無駄な部分は削ってるつもりですが・・・。

本当にありがとうございました。

日常2、芹、七華（前書き）

思うように瑠美のストーリーが書けない為、先に芹・七華サイドの話を載せます。
なので1話先のお話になります。

日常2、芹、七華

瑠美が誘拐されて2週間が経ち、二人の少女の日常はそれぞれ変わりつつあった。

＊＊＊

浜瀬芹は朝早くに起き、勉強をする。
それは瑠美のそばに居る為に、同じ中学・高校・大学に通う為には、学力が必要だと知ったから。

登下校の時間。
（るみちゃん・・・。）
芹は無意識のうち、瑠美の姿を探していた。
スカートを握り締める。頭では無駄だと解っている。
それでも・・・、
「えとね、おままごと！！」初めて友達（るみ）と遊んだあの日から、
「えへへ、るみちゃん」毎日手を繋いで、笑い合った。
「ゆびきりげんまー」クラスが別れた時には、これからも一緒に帰る約束をした。
「虐められた時は俺に言えよ？守ってやるからさ？」時には心配もされ、
「せりね、きょうにじかんもはやくおきたのよっ！」辛い時には構って貰った。
「せりのはなしかた、きらい？」そして唯一、話し方を可愛いと褒めてくれた。

いつも芹の隣には瑠美が居た。

（会いたいよ、るみちゃん。。）

この、かけがえのない日々が、芹にとって確かな宝（おもいで）で、藤堂瑠美を心の底から求めさせた。

そして、嫌でも幸せだったと気付かされ、何も出来なかった自分が、大好きな瑠美を誘拐させてしまった自分が、何より許せなかった。

芹は剣道の初稽古に出る。

はぁはぁ

（きついのっ）

普段運動をしない少女には厳しい修行だった。

だからこそ、この修行を乗り越えた時、強くなれると思えた。

（せりがっ、るみぢゃんをまもるのっ！！）

そして、あっという間に稽古が終わり、車の中での帰り道。

ぼーっと星空を眺めていた。

（せりはぜったいつよくなれるの。ううん・・・ならないとだめなのっ！！）

そう思い込まないと不安になった。力の差と言う物を見せ付けられたのだ。

子供達は幼いが故に自分の力を誇示したがる。

故に手加減と言う言葉などは存在せず、芹は稽古の最後に行った組み手でボコボコにされた。

（ねぇるみちゃん？

せりね、きつくて、こわくて、いたくても、がんばりつづけるか

らっ。
こんどはね、つよくなって、まもれるようになるからっ！
だからね、るみちゃん？
せり、ずっとずっとまってるから・・・）

＊＊＊

（許さない許さない許さないッ！！）
星七華は愛する藤堂瑠美が未だ見つからず激昂していた。
（全て全て全て、出木真央（あのオンナ）のせいだ！復讐してやるッ！！）
しかし肝心の真央は瑠美と同じく行方不明であった。
（なら、父親だわ！！）
七華は誘拐された件で真央の父親が出木康平だと知った。
政治家なら必ず裏で悪いことをしている。この間だって汚職問題が発覚しニュースになっていた。
（犯罪一家にしてやる！！）
七華は、犯罪者の娘と言う枷を出木真央に背負わせるために、出木康平を徹底的に調査することにした。
（私の瑠美を奪ったんだ。だったら私は、あの女の家族を奪ってやる！
そして二度と、私と瑠美の前に現れることが出来ないように追い詰めてやる！！）

七華は半年もの間、ずっと出木康平について調べまわった。
本や新聞、ホームページは勿論、翻訳サイトを使い、外国の新聞やホームページまでも調べた。
しかし出てくる情報と言えば、功績や称賛、その他関係無い事ばかりで、悪評や批判は当然の如く、悪い噂の一つすらも存在しなか

った。
「なんでなんで！？！？」
出木康平は綺麗過ぎる政治家だった。
それでも七華は狂信してた。
出木康平は出木真央（あのオンナ）と血の繋がった家族なんだ。ならば間違いなく有害である筈だと。
そしてその想いが通じたのだろうか。
「フフ・・・、やっとみつけたわ」
１４年前の新聞で、疑惑の書かれた記事を見つけた。
内容は裏で組織票を買ってるとか無いとか。
七華は折角掴んだこの情報をもっと詳しく知りたいと思った。
また、この記事を書いた記者なら他にも何か書いてるかもと期待もした。
だから、七華は調べることにした。

その記者は１２年前から行方不明になっていた。
ゾクリ
何故か、誰かと似てる、そんなふうな気がした。

ふと思い出す。
あの女が転校してきたばかりの頃であった。
「ねぇねぇ、お母さんが言ってたんだけど、貴方のお父さんって、偉い人なの？」
「・・・」
「ねぇねぇ、凄いんだね？」
「煩い・・・」
委員長だった私は友達が出来ないあの女を心配して付け回していた時だった。
誰だかに父親のことを聞かれ、あの女は何故か、恨みや憎しみの篭った表情（かお）をしていた。

まるで実の父親に対して敵意を持っているかのように。

そうか・・・あの女とこの記者が似ていたのか。

他の者達と違い、出木康平を敵に回したと言う意味で。

星七華は出木康平が綺麗過ぎる政治家だからこそ、無視出来ない程にその事実が気になった。

日常2、芹、七華（後書き）

文書力が無い中、此処までお付き合い頂きありがとうございました。
やっと第1章でキャラ作りをしてきた意味が出てきたって感じです。

日常3、七華2（前書き）

初回掲載日と新しく投稿した内容の場所が違くてスミマセン。

日常3、七華2

出木真央の父親で、現外務大臣である出木康平は、諸外国から高い評価を受けていた。
それは偏(ひとえ)に交渉の上手さ、この場合は外交能力の高さにあった。
康平が交渉を行うと、必ず両者にとって満足のいく結果になったからだ。
また世間からは、正々堂々とした態度でスキャンダルの無いことから、クリーンな政治家として評判が良かった。
そして国民からの信頼も、実績を積み上げるうちに厚くなり、今では次期首相と評されるまでに上り詰めた。

出木康平は唯(ただ)一度の失敗も無く、まさに完璧なキャリアを歩んでいた。
そこに至るまで、多くの敵が存在したにも関わらずにだ。

（あと、少しだ・・・。）
それは愛した女性の願いを叶える為の、
（見ていてくれ・・・。）
一人の男の狂気に満ちた決意があった。

＊＊＊

娘の出木真央が相手の目を見ると心が読めるように、父である出木康平も相手に触れることで心が読めた。
そして康平もまた、幼き頃に沢山の悪意に触れ苦しんだ。

しかし真央とは違い、絶望する前に、一人の女性と出会った事で救われた。

出木康平の家系は代々の華族であった。
その為か父と母は金と権力に汚く、また周りに居る人間達も同様で、康平は人間不信に陥っていた。
そんな時、政治家主催のパーティーで9歳年上の女性、一条凪（いちじょうなぎ）と知り合った。
凪は一般家庭で育ちながらも、党に籍を置ける程の才女で、信念を持って国会議員を目指していた。
それは愛する日本の為に働きたいと言う純粋な想いからで、権力者とは思えない程、心の綺麗な女性で、康平は付き合っていくうち、支えたいと思うようになり、周囲の反対を押し切って秘書になった。

ある日、康平は悩む様子を見せる凪に、己の秘密を明かし、相手の心を読むことで役に立とうとし、叱られた。
「康平君は十分役に立ってるよ！」
手を握られ、本心からの言葉だと解った。
「だから、大丈夫！」
心配しなくても、皆の頑張りのお陰で応援してくれる人達は増えてきてるから。
「それに、私は笑顔が見たくて頑張ってるんだよ？」
勿論、貴方のだって。
「だから、そんな事しないで！」
その超能力のせいで、絶望するくらいに傷付いてきたのだから。
と、真剣な目をして止められた。
凪の思いやりに、康平は泣きそうなほど感動した。

秘書として働く日々。毎日が穏やかで充実していた。
そして、ついに1ヶ月後に議員選挙へと出馬すると言う時、凪は事故にあって死んでしまった。
康平は亡骸を見て絶望した。

御通夜の日、康平は凪の父から一通の手紙を貰った。
それは凪からの遺言で、
「康平さん、もし私が亡くなった時には、お辛いと思いますが、悲しまずに、どうか日本を諸外国の侵略から守り、また汚職に塗れる政治家達を変えて下さい。」と、書かれていた。
凪が背負ってきたものだった。
この数年間、嫌と言うほど日本の現状を知り、凪は秘密裡に戦う準備をしていた。

康平は凪の悲願の為に政治家になる決意をした。
（・・・凪さんは怒るかもしれないが力を使おう。）
それが国会議員ひいては悲願達成の近道となるのなら。

出木康平が心を読んで敵か味方かを判別していた時だった。
ソレを知ったのは。
頭が真っ白になった。自分を殺したくなった。
今まで見てきたじゃないか？人間と言う醜い生き物を。
それなのに疑うことを止め、凪の死と言う最悪な結果を招いてしまった。
後悔せずには居られない。
凪は政治家の罠によって殺されていたのだ。
康平は今まで我慢してきた苦しみや悲しみが怒りと憎しみに全て変わった。
そして康平は凪を殺した相手に復讐することで、枷が外れ狂い始める。

愛した女性への想いは誓いへと昇華する。
悲願の為になら何だって利用しよう。もう、手を汚す事だって厭わないし、必要なら殺しさえもして見せる。
これが彼の歪んだ信念となり、頂点へ歩み始める一歩となった。

康平はメイドを使い自分の超能力を検証することから始めた。
そして明確に超能力を定義した上で、味方に出来る者は取り入れ利用した。
反抗的な者には、それぞれ上手く対応し、どうしようも無い時には暴力団を使い始末させた。
また情報操作を行い、メディアの方でも優位に事を運び、そうして着々と力を着けていった。

康平は世間体と言う物を気にして、妻を作った。
当然そこに愛などは無く、凪の悲願の為であった。
しかし仮にも夫婦だ。
妻の不信感を読み取った康平は、夫婦円満な家庭と言うイメージを崩したく無かった為、愛する振りをした。
そうして子供(まお)が産まれた所までは良かった。

これが出木康平の一つ目のミスである。
まさか、自分の娘が超能力を引き継いで産まれてくるなどとは想像もしなかった。
危険と判断した康平は、真央に監視を付け、出来る限り会わないようにした。
妻も真央が普通でないことに気付き始め、相談した。
しかし康平は忙しいと言って取り合わない。
家から距離を置く康平に妻が離婚をしようと言い始めるのは時間の問題だった。

そして娘の親権の事もあり、妻が邪魔になった康平は殺すことにした。

いつからか忘れたが真央が敵視してくるようになった。
（限界か・・・）
超能力は康平の絶対的なアドバンテージである。
故に知られる訳にはいかなかった。特に政治家やその関係者には。
だから真央を帝日学園に通わせるのにはリスクが高く隔離したいと考えていた。また、康平は超能力の他にも娘からの情報漏洩の可能性も恐れていた。
そして現在、真央は学校で荒れ、康平に会うと敵意を隠さすぶつけて来る。
康平は周囲に説明がし易い今こそが、真央を転校させる絶好のタイミングだと考え実行し、計画が立ち次第、実の娘も始末することにした。

もう彼は戻れない程に手を汚し、狂気に塗れていた。

出木真央が行方不明になって半年が経たった頃であった。
康平は仕事で暴力団と会食していた。
その時、急に力を伸ばし始めたマフィアの話題になった。
暴力団の都合などは興味なかったが、「間宮」と言う名前を聞いて、何故か引っ掛かった。
そして娘の件を依頼したマフィアだと思い出し、念の為に部下に調査させることにした。

（まさか娘が生きていたとは・・・。）
康平は部下から入った報告に頭が痛くなった。
（殺せと命令した筈なのに・・・。）

所詮は金に生きる犯罪者共(マフィア)か。

政治家と暴力団は知られてないが深い繋がりがある。
そして今回の件は特別だったから、政治家と関わりの無い組織(マフィア)に依頼したのだが、それが間違いだった。
とは言え、もし暴力団に依頼してたら、他の政治家に漏れたり、想定外ではあったが真央に心を読まれた時には、危なかったとも考えられる。

これが出木康平の2つ目のミスであり、娘を甘く見すぎた事や、リスクを犯してでも間宮と接触しなかった事が悔やまれた。

（全く、娘をどうするべきだか？
面倒な事態になったものだ・・・。）

＊＊＊

ねぇ、瑠美さん。
私が思った通り、やっぱり出木は碌でも無い一家でしたよ。
ほんと、こんな汚い血の流れた人間が瑠美さんに優しくされて居たと思うと虫唾が走りますっ！！

七華は出木康平の事を調べ、もう一つ類似した事件を見つけた。
それは出木真央(あのオンナ)の母親が行方不明となり、後に遺体が発見されたと言う物だった。
調べてみると本やホームページでは出木康平とその妻は夫婦円満だったと書かれていた。
しかし、住所を調べ近所に聞き込みに行った所、その逆であった事が解った。
要するに、出木真央(あのオンナ)や記者と同じで邪魔だったから消したと言う

事。
出木康平を疑ってる七華にとって、それは決定的な二つ目の事実(クロ)であった。
ふふ、やはりあの女の父親は犯罪者だったか。
綺麗過ぎるのは邪魔者を消していたからなのね。
七華はそう確信した。

さて、すぐにでも警察に告発してやりたいが、どうしましょう？
普通に考えれば、出木康平が犯人であるのなら瑠美の情報を持ってるわよね？
そう言えば、警察は捜査したにも関わらず、何も見つけられなかったのよね・・・。
もしかしたら、警察が出木康平の犬(てした)である可能性も考えられる訳で、・・・直接交渉すべきかしら？
うんうん、そうね。私が瑠美を助けよう！
その方が確実そうだし。
何より、ふふっ♪
私が助けたら、浜瀬さんより、他の誰より、必要な人だって気付いて貰えますわ！
そして他の人は要らないってなって・・・うふふふふ♪
（待ってて、瑠美さん。必ず迎えに行きますからっ！）

＊＊＊

だからこそ、この二人の出会いは必然だったのかもしれない。
1年が経ったとき、それぞれの思惑を胸に星七華と出木康平は邂逅し、運命の歯車はまわりだした。

日常3、七華2（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
過去の話書くの難しすぎるｗｗｗそしてついに終わったー！！
あとは第2章のゴールまで突っ走るだけです・・・が、
今週と来週は私情で忙しいために更新出来ないと思われます。
ではでは、失礼いたします。

日常4、七華3

星七華はインターネットの情報を食い入る様に見つめていた。
画面には、1週間後に行われる雅里警察署のイベントにて、出木康平が参加すると書いてあった。
ぎゅっ、七華のマウスに込める力が強くなった。
やっと・・・出木康平（はんざいしゃ）と交渉（はなし）が出来る機会（チャンス）がきましたか。
長かった。本当に長いこと待ちましたわ。
まぁそれも、今日で終わりですが・・・。
これからが本当の勝負（メイン）！行動開始ですわっ！！

＊＊＊

ねぇ、瑠美さん？
ついに明日です。

ふふっ♪
瑠美さんを助けたら、何しようかしら？
まずは沢山お話して、再開できた事を二人で乾杯かな？
あっ！！その時、お礼のキスをされたりしたら、どうしましょう・・・／／
他には、一緒にお風呂に入って洗いっこしたり、同じお布団でギューって抱きしめ合って寝たりもしたいですわね・・・。
あっ、そうですわ！
これからは私が瑠美さんの傍に居ないと駄目ですから、当然いつも一緒で、遊びに行ったり泊まったりする機会なら、いくらでもあ

りますわよね！！
それに登下校だって・・・浜瀬さんを捨てて私を選ぶに決まってますわ！！
ああ、そうしたら、毎日朝から瑠美さんと会えて、そのうえ手を繋げますわっ！
何て、何て素晴らしい未来（まいにち）なんでしょう♪
本当、楽しみです！！

だから、ちゃんと待っていて下さいね？
瑠美さん？

＊＊＊

出木康平は選挙活動（イメージアップ）の一環として子供の安全を守る取り組みに参加していた。
講演が終わり、事務所に帰ろうとした時であった。
「待って下さい。」
康平は一人の少女に腕を掴まれ、目を見開き驚愕した。
「誘拐の件でお話があります。」
（貴方が黒幕（はんざいしゃ）だと言うのは知ってるのですよ？）
康平は不可抗力ではあったが触れた事によって心を読み、即座にこの七華と言う少女の危険性に気付いた。
「君は娘の友達なのかな？
そうだね・・・。
とりあえず、落ち着いて話が出来る場所に移動しようか？」
七華はコクリと頷き、顔を下に向け康平の後について行く。
（とりあえず上手くいきましたが・・・、私が出木真央（あのオンナ）の友達ですって！？
ふざけないで下さい・・・！！冗談も大概にしないと殺しますわよ？

ぁぁ、汚らわしい！汚らわしい！汚らわしいですわっ！！
はぁ・・・。
やはり、瑠美さん以外の人間は皆ゴミです。
助ける為とは言え、こんな男と話すのは苦痛すぎます。
全く・・・、物事には順序があると言うのは解りますが、さっさと本題に入りたいものですわッ！！）

料亭に着き、まずはお互い簡単な自己紹介をした。
「さ、じゃあ料理でも食べながら、話を伺おうか？
誘拐に関してだっけ？七華ちゃんは何か知ってるのかな？」
「ええ、誘拐した犯人を知ってます。
そうですね・・・。少し話を変えますが、出木さんは奥さんと上手くいかず、娘さんからは嫌われて居ましたよね。
他には、出木さんの悪口を書いた○×記者さんとかも居たのですが、何故か皆共通して、貴方にとって好ましくない人物だけが、誘拐されたり亡くなったりしてるのですよ。
不思議ですよね？本当に。
それでですね？私としては出木真央と一緒に誘拐された藤堂瑠美さんさえ無事なら、他の誰がどうなろうと別に構わないのですよ。」
（出木真央（あのオンナ）なんて、死んで欲しいくらいですし。）
（よくもまぁ、調べたものだな。
しかし、この少女・・・。）
康平は七華の心を読めば読むほどに、危険な存在ではあるが、同時に利用出来る存在でもあることに気付いた。
（消すのは決まりだが、考えようによっては利用する方が良くないか？
どうも我が娘に嫌悪感を抱いてるようだし、容易く操れそうだ。）
「だから取り引きしませんか？
私は自分の手で瑠美さんを助けたい。そして犯人（くろまく）である出木さんになら、ノーリスクで瑠美さんを助けだす環境を作れる筈です。

要するに、力添えして頂けるのなら、誰にも話(バラ)さないと約束しますわ。」
（ふふ・・・一人で瑠美さんを助けないと意味がありませんし、ね。
それと、当然助けた後は、用無しなんで犯罪者となって貰いますが。
そもそも貴方もあの女も許す筈無いじゃないですか？きちんと瑠美さんを奪った罰、受けて頂きますよ！！）
（なるほど・・・。
要は藤堂瑠美と言う少女を独り占めにしたいのか。
んー・・・。
この少女は妙に思い込みが激しく、しかも娘に殺意を抱いてる。
だから、理由が何であれ藤堂瑠美が娘に殺されたと伝えれば、簡単に信じ込み、間違いなく殺し合ってくれるだろう。
と、なると、この際だ。
政界にパイプを持ちながらも誘拐に絡んだ、愚かな暴力団に戦争でもして貰おうか？）
圧力をかけて。
（そうしたら、娘を匿ってるマフィアを潰せ、娘とこの少女も死に、効率良く美味しい結果が得られそうだな。
どちらにせよ、この少女の性格を考えれば、消すのに一苦労しそうだし、仮に瑠美と言う少女を助けに行かせ、目的を達成させたら、どんな行動に出るかは火を見るより明らかだ。
それなら・・・自発的に殺し合って貰うのが一番だな。）
それに調べて来てるだけあって、色々と厄介な仕掛けを施してるようだし。
「解った、と言いたい所だが、すぐには準備が出来ない。少し待って貰えないか？」
（予想はしてましたが、やはり待たないと駄目ですか・・・。
まぁ、此処まで来たのですから、少しくらいは我慢しましょう。）
怖いくらいに順調すぎますし。

「・・・解りました。ほんの少しだけなら、お待ちしましょう。」
（時間も多くは無さそうだし、早急に動くか。
まずは藤堂瑠美と言う少女の居場所に関してだな。）
「では、準備が出来次第、連絡しよう。」
（まぁそれは、私の策略の為の準備となるがな。
それにしても恐ろしい少女が居たものだ。
まぁ今は、それが逆にありがたいがな。
何せ・・・、自分のミスの産物が殺し合ってくれると言うのだから！）

＊＊＊

「瑠美ちゃん、敵（ソイツ）を殺せ」
敵に銃を向ける。
ここで敵を殺さないと俺が殺されるかもしれない、と肌で感じた。
「・・・瑠美ちゃん？」
それなのに打つことが出来ない。
「ッツ！！」
自分のことしか信じてなかった、自分のことしか愛せなかった、
そんな俺が、他人の命を奪うことを躊躇うなんて・・・。
「・・・」
やはり出来ない。
だって頭に、芹や七華の笑顔がチラつくんだ。
本当（ホント）今更だが、俺は二人のことが大好きだったんだな・・・。
止まったままの瑠美に次第と組員達はイラつき始めた。
「おい？まだ殺せないのか？」
「鏡さん、やはり・・・。」
「静かにしろ！
なぁ瑠美ちゃん？一体どうしたんだい？？」
俺はずっと変わらないと思ってた。

だけど、前世の自分とは違い、大切な他人(ともだち)が出来てその幸せを知り、弱くなってしまったんだ。
「・・・鏡さん、俺には出来ません。」
だってもし殺してしまったら、二度と他人(かぞくやともだち)と笑い合えなくなる、二度と今の自分に戻れなくなる、そんな気がしたから。
「瑠美ちゃん？何故こんな簡単なことが出来ないの？」
瑠美ちゃん程の子なら余裕でしょ？と、鏡には理解できなかった。
「んー、なら殺せたら、出木真央のことを教えてあげるよ？」
真央と聞いて瑠美は少し反応したが首を横に振った。
それを見て組員達の我慢(ふまん)は限界を超えた。
「鏡さん！いい加減、目を覚まして下さいッ！！
この少女はあくまで一般人(ふつうのこども)ですよ！？やはり・・・出来る訳が無かった！時間の無駄です！
そして・・・早急に始末すべきです！！」
「・・・大丈夫だ！今日は調子が悪いだけで、瑠美ちゃんなら問題無い！」
（ほんと、見る目の無い奴等だ。何でも完璧にこなしてきた瑠美ちゃんが、この程度のことで躓く筈ないじゃないか。）

鏡は次の日も次の日も説得を試みた。
しかし、一向に意味が無く、部下からは口煩く言われ、次第に瑠美への想いは失望へと変わっていく、最中であった。出木康平から鏡宗助へと電話が掛かってきたのは。
鏡の組は、出木真央の誘拐に関与した事を知られ、援助を切らない代わり、誘拐の依頼をしたマフィアを潰せと命令された。
そして最後に、
「鏡、藤堂瑠美と言う少女を飼ってるだろ？
金なら出す！条件付きではあるが少女の代替品(ほしなな)だって出そう！
だから藤堂瑠美(そのしょうじょ)を・・・始末しろ。」

日常４、七華３（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

嘘予告（前書き）

これは嘘予告です。本編には全く関係ありません、作者の妄想です。
もし本格的に書く気になったら、にじファンにて掲載します。
内容的には「転生したけど・・・」の主人公”藤堂瑠美”によるＩｆ√での異世界訪問物ストーリーです。

嘘予告

＊設定＊

藤堂瑠美は人を殺し、暴力団の一員として認められた。
心技体を鍛えつつ、仕事をする毎日。組長である鏡宗助に気に入られ、尚且つ高い才能を示す瑠美は若干１２歳にして暴力団の幹部となった。
そんな藤堂瑠美はいつものように仕事に行って、何故か異世界に迷い込んでしまい幕が開いた物語。

＊嘘予告編＊

（この声が聞こえる人にお願いします。助けて下さい！）

「ここ何処だよ？」
俺は部下（クズ）共を連れ、敵（ゴミ）の処理をしていたら、いきなり白い光に包まれ、気付いたら此処に居た。
ああん？何がどうなってやがる・・・？
瑠美はポケットに手を突っ込み携帯を取り出し部下共に電話をかける。
「おかけになった電話番号は現在使われておりません」
は？舐めてんのか？
「おかけになった電話番号は現在」
っち、ふざけやがって！！
電話帳から鏡宗助の番号を呼び出し電話をかける。

「おかけになった電話番号は現在使われておりません」
・・・は？繋がらないだと？自分を溺愛する鏡（クソヤロウ）に。
はは、ざけ（助けて下さいっ！！）
とてつもない音量で頭に響く。
ッツ！！煩いッ！誰だか知らんがブッ殺すぞ！？
イライラしながら声の聞こえる方に行くと、白いフェレットが居た。
「あのっ、ボクの声が聞こえるのですか！？」
「・・・ああ、聞こえるよ。」
「た、助けて下「煩い。」」
グシャ、瑠美はフェレットを踏み潰す。
「死ねよ？」
グシャグシャグシャ
瑠美は息の根の止まったフェレットを見下ろしつつ、自分の体に違和感を感じた。
「・・・？」
今まで気付かなかったが、ある筈の胸が無くて、何故か股間に膨らみがあった。
っは？なんだ？このどこか懐かしい感じは？？
モミッ
「・・・ははっ」
オイオイオイ？これは何だ？現実か？現実なのか！？
答えに気付き、笑わずには居られなかった。
理由は解らんが、女だった筈なのに男になって居たのだ。
俺は生まれた時から女であることが耐え難かった。
特に暴力団に入ってからは食い物にされる女達を見て、その度に女である自分が忌々しく思えた。
そう、認めたくはないが、俺は男と言う生き物に怯えて生きてきた。
だから食う方の強者に戻れて、最高に気分が良くなった。

カサッ、草むらから一人、小学生くらいの女の子が現れた。
「あ、あの、そのフェレット・・・。」
ニヤリと口が歪んでしまうのを抑えれない。
なぁ？女ってのは男の食い物だろ？
折角、男に戻れたんだ。なら、することは決まってる。
全く・・・ガキはあんまり好きじゃないんだけどなぁ・・・。
ドサッ、俺はガキを気絶させ、森の中へと移動する。
喜べ？記念すべき１号にしてやるよ？あはははは♪

２０ＸＸ年、にじファンにて掲載予定！？
あの物語にダークサイドに落ちた藤堂瑠美が出演しますｗ！

嘘予告（後書き）

ついつい書いちゃったｗｗｗ
オナニーですみません（；；）
本編に関係なくてすみません！

ネタ（前書き）

これはネタです。本編には全く関係ありません、作者のお遊びです。
内容的には「転生したけど・・・」の主人公”藤堂瑠美”による異世界訪問物です。
注：キャラが違うかも

ネタ

＊設定＊

藤堂瑠美が第１章１２部における誘拐事件の前に、異世界のとある人物に召還されて幕が開いた物語

＊ネタ編＊

「あんた誰？」

もし異世界に召還されて、この言葉を最初に聞けたのなら、その地点で勝ち組だ。ｂｙ作者。

何故か鏡に吸い込まれ、気がついたら知らない場所に居た。

（えーっと・・・何、此処？）

周りには魔法使いのコスプレをしたガキ達とハゲしか居ない。

「ウｔｇｖｙｔｃｄｙｒｃ９ｂ？」

そして目の前に、目の前には、さっきから何語すらかも解らない言葉で話しかけてくる、ふくよかな御方が居た。

「ハァハァ、ｈふぃうあぎがあ」

何故だろう？俺を見る目が非常にキモイ。

妙に熱が篭っていて、しかも鼻息があらかった。

そのデブがハゲと何事かを熱心に話し始める。チラチラと俺の事を見ながら・・・。

そしてスキップで俺の前にきた。おー肉が揺れる揺れる・・・って言うか、なんかね？嫌な予感しかしないんだけど。
だって、両手を広げながら、妙に唇を突き出して近づいてくるんだもん。
（ねぇ？ホントなんなの？（涙））
ていっ、かなり重かったが、上手く流した。
案の定、抱きついてきてナニかをするような気配だった・・・。
俺は戦慄する。
（ありがとう、ありがとう！！）
やば・・・。今日ほど、合気道を習っていて良かったと感謝したことはない。
「ああ、気持ち悪い奴めっ！！」
グリッ、俺はデブの頭を踏み潰す。
ブヒッ、・・・え゛？何故だろう？何か喜んでるように見えるのですが？？
「うう・・・なんでだろう？なんか汚されてる気分。。」
グリグリグリ
びくんびくん
デブは幸せそうな顔だった。
（なぁ・・・もしかして、ここに居る奴等、みんなこうなの？コスプレした変態集団なの？）
このデブやワイシャツのボタンが全開な御方を見ていると、そうとしか思えなかった。

これは続きますか？いいえ、ネタです。↑
あの物語に出てくるふくよかなお坊ちゃまと藤堂瑠美が同棲することに・・・。
もともとMとしての才能があった彼は目覚め、最初から全開の攻防が始まったw！！

「もっと、踏んでぇー！足で！尻で！！踏んでくれぇーーー！！」

え？魔法？？そんなのはおまけおまけw

メインは踏むか踏まないかですwww

ネタ（後書き）

ああ、これは酷い

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6133s/

転生したけど・・・

2011年6月24日00時25分発行